
くるくるしては閑暇と鳴くよ、啼かないよ。

まいまい？

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くるくるしては閑暇と鳴くよ、啼かないよ。

【Nコード】

N3530H

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

『今日も、辺境に住む暇人は暇でした。

ヒマだからヒマジンなんです。あまりにヒマすぎて、マヒしてしまっんです。

そういうわけだから、暇つぶしに魔王退治に行くことにしました。この世界には、魔王がたくさんいるのです。自称も含めて、それはもうたくさん。

そして、いつの時代も、一人は必ずいる、まじめに世界征服をたくらむ暇人いや、魔王が。

だから、魔王を倒しに行こう！ 世界を救いましょう！
そう思い立った今から、暇人のマイブームは魔王倒しになりました。

なので、勇者と魔術師をつれ、云々と……

彼らの企む悪だくみ（的な何か）を阻止するために、襲いくる魔物や四天王や魔王をばったばった切り捨てました。

そうして、勇者は世界を救ったのです』

エピソードから始めるよ？

『今日も、辺境に住む暇人は暇でした。』

ヒマだからヒマジンなんです。あまりにヒマすぎて、マヒしてしまふんです。

そういうわけだから、暇つぶしに魔王退治に行くことにしました。この世界には、魔王がたくさんいるのです。自称も含めて、それはもうたくさん。

そして、いつの時代も、一人は必ずいる、まじめに世界征服をたくらむ暇人いや、魔王が。

だから、魔王を倒しに行こう！ 世界を救いましょう！
そう思い立った今から、暇人のマイブームは魔王倒しになりました。

なので、勇者と魔術師をつれ、云々と……
彼らの企む悪だくみ（的な何か）を阻止するために、襲いくる魔物や四天王や魔王をばったばった切り捨てました。
そうして、勇者は世界を救ったのです』

「そう言う話」

しゅりるりは、本を閉じながらそう語った。いつものことなのだが、相変わらずおかしな本ばかり（今回の場合は、しゅりるりの日記なのかもしれないが）、その鞆からは出てくる。

「云々と……って、大事なところ、省略しすぎじゃない？」

黒いローブに身を包んだありすは、言った。

「じゃあ、あのくるくるとした冒険を、一言一句見逃さず、空白や行間でさえ見えるように、その55、121字もの文字を、丹精こめて読み上げようか？」

赤褐色の本の角を手の平の上に乗せて器用に回しながら、いたずらっ子のような笑顔でしゅりるりは笑う。しゅりるりならば、やり

かねない。こういう意味のないことに命を賭けるような人物なのだ。

「遠慮しておくわ」

先手必勝、ありすは即座に断った。

「じゃあ、読むよ？」

しかし同時に、その返事をかき消すように、しゅりるりもそう言っていた。

しゅりるりは息を大きく吸い、そして、部屋の真ん中で、一人芝居を始めた。

「はいはい、そう言う話だったわね」

ありすは、すでに自分の魔道書に意識は向いていた。飽きるまで、やらせておけば良いのだ。しゅりるりは、暇さえつぶせれば、観客がいなくても、かまわないのだから。

「それにしても、勇者様はいつまで寝て いるつもりなのかしら」
ありすは、温かな紅茶を手に、その香りの向こうにある寝台を見つめる。

「ぼくはやっぱ何もしないで、ただ流されていくだけなのかな」
布団から出るタイミングを見失い、狸寝入りをしていたアトリスは、布団の中でそっと囁くのです。

0・運命という齒車に、組み込まれてみせる。

よく晴れた日の昼下がりに。

雲は、北西から、南東へと流れて行きました。

しなくちゃ行けないことはたくさんあるけれども、そんなことは、もうどうでもよくて、ただなんとなく、彼方を見るのもいいかなあ、と思う。

なんとなく一日が過ぎる。

今日が終われば、過去という「トキ」が長くなる。

「ひま」という言葉ほどこいやなものはない。

その言葉について考えると、その言葉のとおりになっってしまう。

その言葉を口に出すと、その言葉のとおりになっような気がする。

その言葉を聞くと、その言葉とおりになっ気分になる。

いわゆる言葉の魔力というやつだろうと、そうささやいた。

ここは、誰も知らない辺境の地にある謎な場所、しゅりるりの部屋。何もすることがなくなったしゅりるりは、ぼんやりと天井を見る。

「あゝあゝあゝ、突然だけど、なぜ、か、暇だあゝ」

しゅりるりは部屋を一周すると、大きな豪華な椅子の上に座る。

椅子は意外と弾力性にとんでいるので、トランポリンとして使えるのだ。

「あゝあゝあゝ、ひままだあゝ」

しゅりるりの小さな体と外見には不釣り合いな椅子の上で、準備体操をしている。椅子の上で逆立ちまでしてしまう。

「ひまーひまーひまー、まひ！」

しゅりるりは逆立ちしたまま手下（その１）に指先を向ける。そこから放たれた怪しげな光が手下（その１）を襲う。

「うわあ！」と、声をあげたのはしゅりるりであった。

逆立ちして片手を挙げてしまったために、しゅりるりは椅子から派手に転げ落ちたのだ。

本来なら、手下が駆け寄ってくるところであるが、しかし、手下（その１）は、魔法にかかり、麻痺しているので助けようにも動けない。

「ひまだなあ」

しゅりるりはひっくり返った態勢のままだ。

手下（その１）も、動けないままだ。

「こういう暇な時、その時。やることは決まっている！」

片足をすっとおろし、それを元に戻す勢いを利用して、ひょいと上体を器用に起こした。

「世界を」

しゅりるりは不敵な笑みを浮かべる。

「世界を、せかいを」

ついには、くるくると回り出す。

「救ったりしてやるー！」

と、勢いで椅子の上から、ジャンプする。

「あっ」

しゅりるりは、なにか青いものを踏んでしまった。

それは先ほど、麻痺してしまった手下（その１）である。

——沈黙。

「……」

長い、沈黙。

「……」

さあらに、沈黙。

「ごめん、つい、踏んじやった」

手下（その１）は、麻痺しているので反抗の言葉も出ない！！！！！！

「はい！ これでよし！」

なかば忘れられていた手下（その１）は、やっと麻痺から回復することができた。

「ひどいっぴ！ ひーどーいっぴ」

手下（その１）はしゅりりを責めたてる。

「あはは、いつものことじゃあゝないか（＾　＾）」

笑顔でそう答えるしゅりりは全く悪びれた様子はない。

「ひ、ひどいっぴ……」

「うふふふ、帰ってきたら、色々お土産あげるからゝ」

しゅりりは、ふくれ面の手下（その１）を適当になだめ部屋を出た。

そして、廊下を走る。廊下は走ってはいけない！ というのは、人間の、主に学び舎で適応されるルール。ここではそれは通用しない。

しゅりりは、地底深くまで続く螺旋階段をどんどん下りる。減

速することもなく、走り抜けたしゅりるりは目の前の入り口に飛び込んだ。

そこには、世界を見渡す『目』があるのだ。

こういう外界とは切断されたところに住居を建てる人の必需品なのだ。秘境に住んでいても世界の情報は満遍なく手に入るにこしたことはないのだ。

「何か面白そうなおことはないかな」

浮かぶ黒曜石の『目』に、世界が映る。

しゅりるりは、映し出された映像と音声に意識を集中する。

再び闇の循環が現れ、

新たに力、目覚めしとき、

その闇の循環を断ち切るか、

それは、渦に飲まれて破壊の循環か――

――お告げは長々と続いている。

「相変わらず、長々、難解なおつげだなあ。でも、なんと都合よく世界征服を志す魔王がいるではないか！」

この世界には魔王があふれている。魔王と言っても、世界征服を趣味にしている者ばかりではない。魔王にも、色々いるのだ。そして、いつの時代も、一人は必ずいるのだ、世界征服をたくらむ暇人いや、魔王が。

「そんな暇つぶしにもならない世界征服を企むなんて、本当に暇なんだなあ」

しかし、力を手に入れた新米の魔王とあつては、世界征服は企んでしまうのも、うなづける事実。

「まあ、新米さんが陥りやすい思考だね」

しかし、そういう魔王が定期的に現れるからこそ、「世界を救う」という暇つぶしのネタ……ではなく、勇者による魔王退治伝説のネタには尽きないのだ。

「さてと、世界を救うためには、まず仲間を見つけなくては。やっぱり世界を救うのは、勇者と魔術師と決まっている。勇者と魔術師を何としても仲間になんては」

そこらへんの情報も、この『目』で、ぴぴっと調べれば、あつという間。

「なんと！ 都合が良いことに、あの勇者の子孫が旅立ったのかあ！ 運命はしゅりるりに向いていた。たとえ向いていなくても、強制的に向かせてしまうのだが。」

「ちょっと面影がある。それにしても、懐かしいなあ」

今思い出しても、笑みがこぼれる昔の記憶、思い出。

「あれは、なかなか。本当に神々に愛された人間だったなあ」

あはは、としゅりるりは笑う。今度はどんな者なのか。

「とにかく誰にも見つからないように、こっそりでかけなくては……」

必要な情報はそろったのだ、すぐにでも旅立ちたい。特に、几帳面な執事（しゅりるりは彼のことを「ひつじ」と呼んでいる）に知られると、うるさい。「ヒツジではなく、正しくはシツジです」と、いつも怒られるから。まあ、見つかったとしても、それだけなのだから、別にどうでもいいと言えば、どうでもいいのだが。

「……さつき、踏んじやったやつを身代わりにして、しばらくの間、ここの主にしておくのも面白いかも。どうせ何かが尋ねてくる予定なんて、当然なのだから」

思いつきで物を言い出したら、止まらない。

（暇つぶしになりそうな冒険ができそうだ）

「果たして世界はどうなってしまうのか」

しゅりるりは秘密の道から外の世界へ出て、そのまま人間たちの住む村へ、勇者が現れるであろう村へ歩き出したのである。

こうして、しゅりるりは暇つぶしのための、不可解な動機で世界を救う冒険は始まったのである。

1・それに、巻き込まれた者たち。

呼ぶ声が聞こえる――

――アトリス。

そう、遠くから聞こえた。

――アトリス……早く。

声は近く、はっきりとしてくる。
しかし、体は、意識は……重い。

――早く起きなさい。

――アトリス。

「……もう、あと5分」

アトリスは、やっとのこと言葉を発した。

「……アトリス！ おきなさい！」
体が揺さぶられる。

「起きなさいってば！」

心地良い時間は、母親によって崩された。

「いつまで、ごろごろしているの。もう出発の時間でしょ？」

少年は、ぼんやり起き上がる。

――突然だが、ボクはかの勇者の血を引いている。これが、災いの始まりだった。最近、世界征服を企む魔王の魔の手が、人間にと

つて、脅威になってきた。だからご近所さんから、プッレシャーとも言える期待の眼差しが痛いくらい突き刺さっていた。

「魔王なんて、現れるな……！」

それは心の叫びであった。

アトリスは、かの有名な勇者の血を引いているだけなのだ。そんなことを思っただけでも、世間の期待は日増しに増えていった。そしてついに、アトリスは自らの誕生日の日に、なかば強引に旅立ちを迫られたのである。

誕生日の日に旅立つのは縁起が良く、昔から伝えられているらしい。どんな言い伝えだろうと思いつつも、アトリスは、旅立たなくてはならなかった。

しかし考えてみれば、故郷にいてご近所から希望の圧力を受けて暮すよりは、見聞の旅をしたほうがまだ良いのかもしれない。かの偉大な勇者の血を引いているが、この故郷さえ出ればごく一般の少年、それ意外に見えない。

——これはチャンスだ！

そう思うと、決断は早かった。少年はあっという間に旅立ちの準備をした。まあさせられたとも言いが、しかも、かつて勇者が使ったといわれている秘宝まで持たされた。

そして、今日——出発の日。ありきたりな、旅立ちの日。ご近所さんに挨拶を済ませ、故郷を出た。

勇者の血を引くアトリスは、生まれてはじめて「自由に」旅ができた。

「ああ、開放ってすばらしい」

世界を救うなんて大きすぎることはどうでもいい。ただ純粹に気ままな旅を味わおう。

そのように、かの勇者の血を引く少年は思う。

——が、そうはいかないのも、物語の常識。

そう、アトリスの幸せな自由な旅は、そう長くは続かなかった。勇者の血はそう甘くない。魔王との闘いに巻き込まれるのです。

そう、やつが現れたのだ。

それは、アトリスが宿屋で休んでいる時に起こった。

「君が勇者だ！ でかけるよ！」

突然、見知らぬくるくるしたヤツが、部屋へ入ってくるなり言い放った。

「だ、誰だよ？」

しかし、アトリスは起き上がらない。

「ほら、出発するよ！ 行くよ！」

床に寝転がって、だらだらしているアトリスを揺らしながら言う。

「ええ〜！ なんだよ〜、どこにだよ、面倒お」

「魔王、魔王を倒しに！」

少年は容赦なく、揺さぶり続ける。

「わわわ、分かったよ」

なんだか、逆らうのも面倒なのもあって、

仕方無いので、アトリスはしぶしぶついていくことにした。

「なんで、ボクが勇者の子孫だとわかったんだよ」

勇者にさせられた少年は、ふくれつつらで、疑問を投げかける。

「ん〜、企業秘密」

しゅりるりと名乗ったその侵入者は、人差し指を唇の前にそっと置いた。

今ここに、面倒くさがりと、暇人のコンビが、できあがったのである。

一緒に魔王を倒すと、一方的な約束を結び、しゅりるりとアトリスの二人は、宿から出て村を歩いていた。そこで、また事件がおきた……いや、しゅりるりが起こした。

「早速、良い人はっけーん♪」

突然しゅりるりは、一人の少女に目をつけ駆け寄ったのだ。

「ねえ、ねえ。その村人よ、村娘よ、君は実に魔術師向きだ！一緒に魔王を倒しに行こうよ！」

どうやら、口説いているらしい。しかも、意味不明な文句で。口調で。

「な、何？」

少女は戸惑っている。無理も無い。

「大丈夫、君には魔法の才能があるから」

「え？ えええ？」

突然のことに、戸惑う村の娘。しかし、しゅりるりは粘り強く、納得させようと説得する。

「一応、魔法は使えるけど。まだ、見習いだよ」

しかし、少女がなんと言おうと、しゅりるりは聞く耳を持たない。

「で、でも、一応師匠に報告しないと……」

「大丈夫、その師匠説得はやってみせる。よろしくね、あります♪」しゅりるりは、はりきる。

「わかったわ。師匠のところへ案内するわ」
ついに少女の方が折れた。

「どうしたんじゃ、あります？ そちらの方々は？」

師匠と思われる老人が問う。

「実は……」

あります、彼女の師匠に事情を話す。

「彼女は実践で伸びるタイプ。それはあなたも感じているはずだしゆりるりは、師匠を説得し始めた。」

「ふむ……」

アリスの師匠は、彼女が連れてきた客人を観察する。

「おや？ その、服……珍しい魔法がどこされておるな？」

しゆりるりと名乗るものが身に着けている白い衣服は、魔法を織り込んだ特製の服であることに気がついた。それは、まるで人の器に収まるための封印、人の気配・匂いになるための具であるかのようであったのだ。

「あは」それに気がつく『人』がいるとは思わなかったよ。さすがだね、ありすの師匠は」

「これほどまで、うまく隠せるモノには、会ったことが無い」

「どうも。この服は特別製でお気に入りなんだよ」

お互いに何か思うところがあるのだろうか、どこか通じ合っているように不気味な笑みを浮かべながら話している。

「……おぬしが何者であるか問うのはよそう」

「そうしてくれると嬉しいな。自分がナニモノであるかそんな哲学的なことを問われて、答えられる人間なんていないもの」

「ふ、おもしろいことを言う」

「し、師匠？」

ありすは、師匠がこの得体の知れない人物と意気投合するとは思っていなかった。

「ありす、世界は広い。こんな小さな村の小さな学び舎で学ぶよりも、実際に外の世界を感じ、学ぶことも多かるう」

師匠は、ありすをしゆりるりに託すことを決めたようである。

「……わかりました」

ありすは、しぶしぶそれに従った。

「これで、メンバーはそろった!!」

しゅりるりはひょんひょん子供のように跳ねる。

「ねえ、この人、いつもそんな感じなの？」

「わからない。僕も、さつき強引に誘われた身だから。でも、そうなのかもしれない」

アトリスとありすの二人は、これからが不安でなかった。

「では、いつてきます」

「ああ、気をつけるんじゃぞ」

長く過ごした学び舎に、ありすは別れを告げた。

「一体どういうことですか？」

彼らが去ったあと、師匠の弟子たちは問う。

「あのものがまとっていたのは、熟練の魔道師でも見破るのが困難なほど、この世界に溶け込むように丁寧に、深く深く幻が縫いこんである。しかし、かすかに臭う異質の匂いは、確かにそこに漂っていた」

師匠は、弟子に言う。

「悪しき力、でしょうか？」

「分からぬ。しかし、アレからは悪意は感じない」

「ならば」

「いや善なる力も、感じなんだ。そう、何も感じなんだ。感じたのは、あの者の服から漂う異質な魔力だけ。この世界にあるものは、大なり小なり魔力を持っている。世界に満ちる魔力が体内に影響を与えるからだ。しかし、あの者はまったく何も感じなかった。いくら、魔法の服で覆いかくそうとも何もないところには、何も存在しない……」

偽次回予告

しゅりるり「魔法 少女（になる予定の）ありすだよ」
ありす「魔法少女になんて、なりません！」
アトリス「……面倒だなあ」

2・町中の魔王退治。

そびえ立つ白亜色の遺跡は、違和感なくその場所に建っていた。ここは崖の先端にほど近いところにある遺跡。手の届くほど近くに空がある。高緯度にあるこの遺跡全体は、別名空中都市と呼ばれている。その中でも、この遺跡は最も高いところにある。外の景色は崩れかけた建物の瓦礫と、名も知らぬ草樹に捕まれた路が広がっている。

なぜ、このようなところに彼らが来ているかと言うと――

「魔王を倒すためには、宝箱に入っている伝説のなんとかとかいう道具が必要！」

と、しゅりるりが、言ってきたからである。というよりも、そういう宝探しをしゅりるりがしたかったという理由があつたからだ。

しゅりるりは『ザ・探索入門』という手持ちの本から、手ごろな遺跡を見繕ってきたらしい。勇者と魔術師を半ば強引に引き連れてこの遺跡に来ていた。遺跡には伝説の物が入った宝箱が眠っているはずなのだが。

「ああ、またかあ」

しゅりるりは、言う。宝箱は、水がたまっているだけだった。

「水かあ。綺麗に見えるけれど、いつからあるか分からないから、飲んじゃダメだよ」

「誰も飲みません！」

ありすは、間をおかずにつつこんだ。

「うゝん、危険だから、こうしちゃおうゝ」

しゅりるりは、宝箱の中身をひっくり返しながら言う。

「あ、やっぱり魔物だ。飲まなくて良かったね」

しゅりるりがこぼした水の中から、動くものが現れたのだ。カビの魔物が発生していたようだ。

「やっぱりって……」

アトリスは、ため息をつく。

「ああ、ああ、うじゃうじゃ発生しているよ」

カビの魔物は弱い。すぐに撃退することはできるが、生命力が強い彼らのことだ、きつと、またすぐに復活しているに違いない。

「もう、しゅりるりってば。はしゃぐのはいいけれど、無駄なトラブルは増やさないでほしいわ」

「まったくだよ」

しゅりるりは、二人の気苦労もしらず、見かけた宝箱を片っ端から開けていた。

「あ、また、宝箱」 ああ、またからっぽだ」

しゅりるりは、もう、たくさんの宝箱を開けては閉め、開けては閉めを繰り返しているが、世の中はうまくいかないのもので――

――見つけた宝箱という宝箱は、全てからっぽ、盗掘されていた。

この遺跡には聖なる神が祭つてある。それゆえ古来より、魔王の侵略、魔物の襲撃、隣国との魔法大戦がある度に、英雄たちの手によって、遺跡から「宝物」^{ガラクタ}がどんどん盗掘されていった歴史がある。盗掘、と言う言葉では誤解があるだろうか。まあ、その様なことはどうでも良い。少なくとも、今、しゅりるりはそう思っているのだから、今はその考えに合わせるとしよう。

「別にそこらへんで売っている物でも、大丈夫だよ。もう、帰りたい……」

すでに飽きている勇者は、言う。さすがに、それで、魔王とやりあうのは心もとないが。

「今時、遺跡の宝箱に良い道具が入っていることもないでしょうに、それにそろそろ、戻らないと……日が暮れるわ」

魔術師はもつともなことを言う。

「たしか、北のほうに村があつたわ。今日は、そこへ行きましょう」博識な魔術師の意見は採用され、一行は村に向かったのである。

「そうそう、その村は……」

しゅりるりは、村へ向かうその道すがら、思い出したようにある噂について口にした。

「……情報によると、そこに最近魔王がでるらしいよ」

まるでお化けか幽霊が出る噂を語るように、しゅりるりは言う。

「それ、どこから仕入れた情報よ？」

「ん〜、風のうわさ！」

「……こんな街中に本当にいるの？」

ありすは、まさか町の中に魔王がいるとは思っていなかった。魔王と言えば、人がそう簡単に行けないような場所に城を構えているのが一般的だったからだ。

「うん。確かに、ここら辺は何かいる気配はするね」

「……何かが納得がいかないわ」

黒いとんがり帽子の下で、ありすはつぶやいた。

「最近の魔王は、そうでもないみたいだよ」

先頭を歩くしゅりるりは、先ほどからずっと後ろ向きで歩いている。前を見ずに歩いているにもかかわらず、転んだりぶつかったりしないのは、きっと、魔法が何かであたりを見ているせいであろう。「もう、どうでもいいよ」

二人のやり取りを、ただただ聞いていただけのアトリスはやる気がない。

この世界には魔王と呼ばれる者がたくさんいる。それはもう、あふれんばかり。その実力や思想は様ではなく、必ずしも、世界征服や何やら悪事を企んでいるわけではない。魔王にも色々いるのだ。そして「自称・魔王」も多いこと、多いこと。しかも、まじめに（？）世界征服を企むいわゆる正統派な魔王は、ほんの一握りしかないのである。

まだ戦闘に慣れていない最初のうちは、そういうラスボス級の魔王では到底勝てない。だから「自称」系魔王の弱めの奴から倒すのがいい。というのも、しゅりるり、ありす、アトリスは、まだ仲間を組んで間もない3人組である。森や草原で出くわす雑魚の魔物は、それなりに倒せるようになってきたが、まだ旅立つばかりで戦闘経験が足りないのである。それでも、そろそろ弱い「魔王」を退治できるだろうと踏んで、しゅりるりはこの情報を提示したのである。

「噂ではここにいる魔王は、いたづらして、迷惑かける程度だし、自称魔王の類だろうね、確実に。」

しゅりるりは、わざと大きめの声で言う。邪悪な気配が近くにいるのを感じたからだ。しかし、その気配は小さく、どこに潜んでいるのか探すのは、少し苦労しそうだった。だから、出てきてもらおうと言う魂胆のもと、しゅりるりはそう叫んだのだ。

「なんだと！」

思惑通り挑発されて、赤い角と赤いツリ目、ゆらゆら動くしっぽ、黒い翼、小さな魔物が飛び出してきた。

「俺様を、自称呼ばわりしたのはどいつだ！」

小さな魔物は、腕を組み立ちはだかっている。

「か、かわいい」

アトリスは、かわいいものには目がない。今にも撫でそうな勢いだ。

「ちょっと、アトリス？しつかりして！ 現実を見て！」

ありすは、うつとりしているアトリスを揺さぶる。

「あうあうわ。わ、分かっているよ、分かっているってば」

「本当かしら」

ありすは、不安げにため息をついた。

魔物はアトリスの様子に眉をひそめていたが、しゅりるりが強引に話を進めた。

「現れたな、自称の魔王！ お前を倒しに来た」

しゅりるりは、自称魔王を指差した。

「だから、俺様は自称ではない！ もう許さないぞ、おろかな人間どもめ。これでもくらえ！」

小さな魔物の小さな指先から、小さな光が放たれる！ 魔力できた光は、一直線に3人を貫こうとした。

しかし、誰もダメージを受けていない！ その光は、人にダメージを与えるには弱すぎたのである。

「きききききき、もう終わりか？」

何が終わりなのか分からない。しかし、光が当たったことに喜びを感じ、上機嫌になっていてこの魔物は、さらに言葉を続ける。

「だが、優しい俺様が冥土の土産に、いいことを教えてやろう（一度言ってみたかったんだよ、この台詞）」

勝手に話を進めている。

「いらないよ、そんなの」

しゅりるりは、にこやかに断った。

「何！？ ほしくないのか？ 土産だぞ？」

自称魔王は、あわてる。

「ん、もらいたいの、山々なんだけれども、手荷物がいっぱいです」

しゅりるりは、自分の道具袋をぽんと叩く。

「実は、ほしいだろう？」

「ほしくないよ」

魔物は、困っている。

「本当は、本当はほしいだろう？」

「いないよ」

魔物は、そわそわしだした。

「……」

魔物は、ついに地面に手をついた。

「……おねがい、もらってクダサイ」

魔物は、頭を深々と下げている。

「やだ」

しゅりるりは、片目をつぶり即座に断った。

「……」

誰もが、無言になった。

「節約、倹約しないと、後が大変だよ。冥土の土産を贈った者は、ろくな事がおきないぞ！」

しゅりるりは、親指を立てて片目を閉じた。

「……それでも贈りたいデス」

「受け取れないなあ」

魔物は、こぶしを握り締める。

「もう！ 誰がなんと言おうと、言っぞ！ よく聞け、そして驚け！」

自称魔王は、長々と冥土の土産を贈った。
しゅりるりは思った。

（この長話の間に、補助魔法で強化が行われていたとは思わないだろうな）

「……土産は、ここまでにして、そろそろ本気でとどめを。ききききききき」

長話もやつと終わり魔物は、身構え戦いが始まった。

まあ、当たり前というか、強化された3人組の前に、その魔物は手も足も出なかった。

おそらく冥土の土産を話している時よりも、短い時間で魔物は力尽きてしまった。

「こ、これで、勝ったと思うなよ。ちくしょー、覚えていろよ」
魔物は、逃げようとする。

「良いよ、覚えておく。忘れないように、もっと覚えこませようか？」

しゅりるりは、笑顔で魔物を追いかけはじめた。

「そうだ。冥土の手土産のお礼に、料理をご馳走するよ……さて、どう料理しようかな」

「ひ」

魔物は、逃げ惑っている。

「うわあ、どっちが悪役かわからないや」

「あれ、本気で遊んでいるわね」

アトリスとありすは、すでに呆あきれ顔だが、ほほえましく追いかけてっこをしているしゅりるりと魔物をみていた。

追いかけてここに飽き戻ってきたしゅりるりは、二人のところへ戻ってきて言う。

「ああ言うしたっぱ系なやつは、とことんやっておかないと、仲間やらボスを引き連れて、のちのちまで、地の果てまで、追ってきて面倒だからね。それは、あんまりいい事態とはいえないのよ」

しゅりるりの考えることは、理解でいるようで理解しがたい。

「それにしても、なんか、かわいらしい魔王だったわねえ」

ありすは、言う。

「みんな、あんな魔王だったら、ボクでも大丈夫そうだ」

実は、臆病な勇者アトリス。

「まあ、なかなか見込みはあるから、100年後くらいには、下っ端ではなくて初級魔王と呼んであげたいね」

しゅりるりの中で、魔王のランク付けの基準があるようだ。

「本来、魔王は、残酷、冷酷、完璧であるはずなんだけど」

しゅりるりは『ザ・魔王になるう』と言う本をどこからとも無く取り出して、最初の方のページを要所要所に読み始めた。

「最近の魔王の流行は、ちょっとばかり、カリスマ崩壊とか、何がしら姿にギャップがあるとか……そういった流行があつて」

「……なんで、しゅりるりがそんな本もっているのよ？」

「あはは秘密」

「まさか、魔王になりたいとか、思っているんじゃない？」

ありすは、その本を手取る。その本の帯の部分には、「君も、今日から魔王になれる！（かもしれない）」という、うたい文句が書かれていたのだ。

「まさか、あんな椅子に座っているだけでつまらなさそうな、暇つぶしにもならなさそうなのは、もういいよ」

「……ん」。あまり深くは追求しないことにするわ」

多分追求したところで、のりくらりと、かわされるのがオチだ。

「その本には、いつの頃からか、『魔王』は、野心と欲望と破壊の絶対悪な職業から、ボケ・ツツコミ・ドジッ子なお笑い担当職になったのか。そういう歴史も書いてあるんだよ。魔王になる、ならないはとにかく、今度読んでみると良いよ」

しゅりるりは、本を自分の鞆にしまう。

「こんな本が結構売れるくらいだし……だからね、ちょっと力があ
る個性的な魔物や魔族やなんかが、勘違いして、さっきのみたいに
勝手に魔王って名乗るんだよね」

「……その本、実は、売れているのね。でも、確かにあんな魔王ば
かりだったら、拍子抜けちゃうわね」

頷きながら、ありすは言う。

「でも、正統派魔王も、ちゃんというよ、絶滅危惧種だけだね。
そっだ、今度、正統派魔王の家に遊びに行こうか？ 封印されちゃ
ってるけれど、解いちゃえば会えるよ」

怖ろしいことを、友達の家に行く感覚の言葉で言う。

ありすとアトリスが、全力でとめたのは言うまでもない。

2・町中の魔王退治。(後書き)

> i 2 3 5 8
— 3 1 2
<

3・偽名古屋弁の魔物だぎゃ

その村には隣の大陸に渡るための施設「転送装置」がある。この村に立ち寄る者たちの大半は、その転送装置の利用であるが、もう一つ役割がある。それは村の東にある湖に浮かんでいる火山へ行くためだ。その火口付近には「世界征服をする」と大々的に宣伝している魔王の城がある。強力な魔物たちも、その魔王の元に集まり、四天王として各地で働き始めていた。

そのため人々は恐怖におののき、世界を救う勇者が現れるのを待っていた。腕に自信がある者たちは、勇者の名声を求めて、この村に集う。そして、おのおの方法で魔王城へ向かい、二度と村には帰らなかった。

「ぼ、ぼくたちも、そのうち、あそこへいくんだよね？」

誰も村へ戻ってこないと言う部分にすっかりおびえているアトリス。

「何怯えているのさ？ ただ単に、魔王に負けちゃって、村に帰る顔ないだけ。村に戻らず、逃げるように故郷に戻っていくだけの事だよ」

しゅりるりはあくまで樂觀的だ。

「向こうへはどうやって渡るの？ やっぱり船で？」

湖は魔物が住み着き、まともに船さえ出せなかった。船で湖に出ようものなら、魔物たちに囲まれ大変なことになってしまうのだ。

「それなら大丈夫。任せて」

しゅりるりの友人には、飛べる者がいるのであるので、火山まで行く手段の心配は要らないらしい。

「場所が分かっているし、交通手段もばっちりなのだから、本当はさっさと行きたいんだけどね」

さつさとその魔王を倒せば良いのかもしれないが、物事には順番と言う物がある。まずその魔王に勝てるように、強くなること。これ重要。最も重要。

「もつと経験つまなくちゃ、ね」

しゅりるりは、アトリスの額をつついた。

まだそうとう先のことになりそうだが、いつの日かその時はやってくる。

「その時は、逃げられないってことね」

たちが悪い、ことに。彼女はしゅりるりの性格を知っていたので、あきらめていた。

「魔王よりも酷いかもしれない」

アトリスは、もう運命からは逃げられないと知った。

「まあ、あと、ついでに四天王も懲らしめておくことも、忘れないようにしないとね」

筆記用具を指の上でまわしながら、しゅりるりは、なにやら今後の予定のようなものを書いている。メモ帳やら筆記用具やら、色々な道具が出てくるその小さな鞆は、魔法の鞆。思ったよりも物が入るらしい。

「さて、村に来たら、まずは情報収集だね」

村の中にある公園は村人達の憩いの場となっている。日向ぼっこをしている老夫婦や、婦人、子供、猫に、様々な生き物達が集まっている。

「適当に、かいさぐん」

その掛け声と共に、各自、情報収集に向かう。

アトリスは、真っ先にプリプルした生き物に近寄った。アトリス

は、この生き物が大好きなのだ。

（彼の荷物カバンは、この生物を模した形をしている）

勇者はいつまでも戯れていて、情報収集などする気配はなかった。

一方ありすは、この公園の池の前で、子供と話している。というよりも、子供の会話につきあわされていた。この子供、973回も話し掛けたと言う伝説を持っているが、カメについての話が長いことでも有名である。ありすはこの少年につかまってしまったのだ。

少年の話は、抜粋するとこんな感じである。

「君は、公園にいるかめさんに見た？ボクなんか、カメさんに973回は会いに行っているよ。また、カメさんのところに行こうかなあ。でもね、家にいるカメさんのほうがかわいいんだよ。実は家のベッドの下には、かわいいカメさんがいるんだよ。おかあさんにはないしょだけどね」

ありすは仕方が無いので、聞いているふりをしつつ、やりすごした。なんだか、いつも疲れる役回りである。

そんな賑やかな公園の片隅で、奥様方が会議を開いているのをしゅりりりは見逃さなかった。

「きいたあ？ 転送装置の施設が四天王を名乗る魔物に襲われて使えないらしいわよ。他の島に行けないって、うちの主人が言ってたわ。困ったものねえ」

それを聞いたしゅりりりは勇者のところへ行き、揺さぶった。

「勇者、勇者、聞いた？ 聞いた？ 四天王だって！ その魔物を倒して 役に立とう」

「お、おう！」

「こんなメンバーで、本当に大丈夫なのかしら」

そういった事情で、彼らはその四天王とやらがいる場所へやってきた。

「魔王四天王と名乗る魔物が！ わたわたた〜」

入り口で、わたわたしている人からの情報によると、どうやら転送に必要な動力源のスイッチの前に魔物がいるようだ。そのせいで、今は転送の機能が停止しているらしい。

「大丈夫まかせて。だから、もう、わたわたしなうてもいいんだよ」
しゅりるりは、わたわたしている人に言っただけで聞かせる。

「は、はい！ がんばってください！」

先ほどまで、わたわたしていた人は落ち着きを取り戻したようだ。
「じゃあ、行ってくるね」

3人は、わたわたしていた人と別れた。

「でも、僕らで大丈夫なのかな？ 魔王四天王って言っていたよ」

「大丈夫だよ、きっとたいしたこと無いから」

しゅりるりの、その自信はどこから来るのか分からない。

「うう、いやだなあ」

そんなわけで、魔物が出ると言う場所まで来た。動力源スイッチの前には、二つの影があった。彼らが人間ではないことは一目で分かる。一人は赤髪で弓を持っている二足歩行のトカゲ型の魔物、もう一人は完全に人に見えるのだが、着ている鴉色の服が魔物の好みそうな形なのだ。

「サスガだねー、テンソーのソーチをつかえなくするなんてー」

鴉色の外套を身に付けた人型の魔物は、そう言った。

「これくらい出来なくては、駄目だよ。きっと今回の仕事が終われば、ご褒美たくさんだよ。悪魔飴（オマイと読む）は、魔王様のところへ早く戻らなくていいのか？」

どこかの方言のような違うような言葉でトカゲの魔物が言う。

「ジャグは怖くないも〜ん」

外見に似合わず駄々っ子系らしい。「も〜ん、も〜ん」と連発している。

「魔王様を、しかも名前の呼び捨てとは、相変わらず怖い者知らずだみゃ。魔王様に言いつけてやるだぎゃ」

悪魔飴の動きが止まった。

「だ、大丈夫だも〜ん。ま、魔王様は、ややや、やさしいも〜ん」

明らかに声の調子がおかしくなった。

どうやら彼らが仕える魔王の名前は、ジャグというらしい。

「しっかり魔王様に報告たのんだぎゃ」

魔物はしっかり念を押す。これでもかと言っほに。

「オッケー」

悪魔飴と呼ばれた魔物は、すかさず外套の下から桶を出した。

「これは、オケー……ぶっ……」

神殿の空気と明らかに不調和な空気が、流れ込んだ。

悪魔飴は、桶を床に落とした。

木特有の軽い音が、からからとゆっくりと転がっていく。

——空白の時。

空間は沈黙に支配された。

この静寂に絶えられず勇者アトリスは思わず、笑い声を出してしまふ。

あわてて口をふさいだが、遅かった。

「あれー？ ダレかいるぞー？」

違和感なく自然に優雅に桶を拾いつつ、悪魔飴は言う。

「ふふふ」スガタを見られたからには、イキテかえすわけにはいかないよ」

と言いつつ、近くの窓に足をかける。逃げる準備をしているようにしか見えない。

「ここにいるラプタルは、つよいよ。にげられないよ。そーゆーわけで、ラプタルまかせたあ。あ、とは、よろしくー」

あくまで、悪魔飴は戦わないらしい。

「でーは、このへんでー。チャララーン！ と、とーそー」
「ちらー」と言う言葉と同時に悪魔飴が手をかざす。

一瞬の閃光。

突然巻き上がる風。

悪魔飴の黒い外套が翻る。

瞬きをした瞬間、そこにはすでに悪魔飴の姿はなかった。

不覚にも「格好良い！」と、人間一同は思ってしまった。が、この考えはすぐに砕かれた。

あの、耳につく声が聞こえてきたのだ。

「おーちーてーしまった！ うわー！ みーずーみーだあー。タ
ースーケー……」

……再び沈黙が訪れた。

そういえば、この転送装置のある場所は、湖の近くがけの上だ。

飛び降りれば、崖。

あの高さの崖から落ちたら、いくら下が湖とはいえ、無傷ではないだろう。

崖の高さを想像していた。

敵のはずなのに、妙に心配してしまっている勇者御一行。

「何やってんだ、あいつは……」

ラプタルと呼ばれる魔物は口を開いた。

「とにかく、邪魔者は排除だ」

この言葉に現実引き戻される。

今、他人のことなど、気にしてはいられないのだ。

この魔物と戦わなければならないのだ。

「まだ子供か」

3人の容姿を見て魔物は言う。

「だが容赦はしないぞ。四天王の一人ラプタル様が、暇つぶしに相手してやるみゃ」

四天王と言うからには、こちら辺に生息する雑魚の魔物とは明らかに異なっている。手に持つ大きな弓からの攻撃が、命中すれば、無事では済まされないであろう。まだ戦闘の経験もあまりないまま、四天王と戦わなければならなくなったアトリスとありすは、息をのんだ。アトリスは家に伝わる剣を、ありすはよくある櫂の杖を、しゅりるりはピコピコハンマーを構えた。

「あれ？ 何かおかしくない？」

勇者は、しゅりるりに言う。

「きにしなーい、きにしなーい、これで叩かれたものは、精神的にダメージを受けるのだ！」

「のだ！ じゃないわよ。相手は、四天王なのよ、真面目に……」

ありすの注意をそっちのけに、しゅりるりははりきっていた。

「ていうかさ、思うことがあるんだけれどさ……そんな、しょばいことするのはさ、四天王の仕事と言うより……むしろ……雑魚敵なしたっぱな仕事……したっぱーっぱーだと思わない？」

しゅりるりは、緊迫した空気を読まない発言をばそつとした。

「うぎい、うぎい、何か言ったかぎゃー？」

ラプタルは聞き逃さない。いや、むしろそれはぎりぎり魔物にも、聞こえるような声の大きさだった。

「ふふふふ。創造神の次の次くらいにえらい、しゅりるりさまに勝てたら、四天王と見とめてあげよう」

しゅりるりは、待ってましたとばかりにさらに挑発する。

「うぎいゝ、雑魚扱いしたにや、ゆるさんだぎゃー。四天王の力見せたやるぎゃ」

「ふっふっふ、かかってくるがいい」

しゅりるりは、わっはっはと笑う。

「これじゃあ、どっちが悪者だかわからないわ……それに、神の次の次くらいにえらいって、何？ 微妙な偉さだねえ」

この流れに、すっかり取り残された魔術師ありすが言う。

「と、とにかく、た、戦おう」

これらのやり取りと聞いているうちに、勇者と魔術師の緊張はどこへやら消えてしまった。こうなっては、雑魚の敵にしか見えてこない。この四天王の口調も変だし。

こうして、戦いの火蓋は切って落とされた。

ラプタルはその大きな弓で、ありえない速さで矢を連射して攻撃してくる。さすが四天王と名乗ることだけの事はある。

勇者アトリスのつたない剣さばき（弓から逃げているためにほとんど当たらない）、魔術師ありすの石を落とす魔法と小さい火を出す魔法（火の魔法で弓を燃やすので精一杯。石の魔法は多少有効だった）、そして、しゅりるりの「びこっ」とする猛攻撃とくるくるな魔法（しゅりるりの動きは予測不可能で弓矢攻撃はことごとく外れている）による戦闘が繰り広げられていた。なんだから、約1名のせいで、見ていてこっけいな風景である。

——数分後。

相手の弓矢が切れてしまった。弓矢だけの遠距離攻撃では、色々無理があったのだらう。それにこちら側には、3人いて、遠距離攻撃と接近戦の分担ができたせいもあるだらう。

「うにゃあ、おみゃーら、強いぎゃ。しかし、これで喜ぶのは早いぎゃ。いつか必ず、おみゃーらを超えて倒してやるぎゃー」

肉体的よりも、精神的にぼろぼろのラプタルは、よくある捨て台詞を言う。

「うん、またねー！ いつでも、遊びにきても良いよー」

しゅりるりは、自分のうちの地図を渡そうとする。

「そ、それは、やめておこう！」

魔術師ありすは、必死に止める。

「うう、（だめだ、こいつを相手にすると精神的ダメージが増えていく……）」

ラプタルはその場を去っていった。

「ばいばーい」

しゅりるりは、友人を見送るように手を振った。

「もう、あの魔物は、しゅりるりには関わりうとしないわね」

魔物の後姿を見て、ありすはつぶやいた。

今日のワンポイント

動力源のスイッチをON/OFFをしすぎると、係りの人に怒られます!!

4・よ〜ん。無気味な声が聞こえるよ〜ん

「あの海辺にある洞窟から不気味な声が聞こえるんだ。こ、怖ひ〜」
村は今朝から聞こえる変な声の響く洞窟の話で、持ちきりだった。
その話を小耳に挟んだしゅりりは、宿屋へ向かう。

「みんな、でかけるよ〜」

部屋をもせずに、その声をかけた。そして、まだ布団の中で眠っているアトリスを起こしに行く。

「勇者、勇者。洞窟に行つて、何がいるか、見てこようよ〜」

しゅりりは、勇者を揺さぶる。

「う、うん」

勇者は面倒くさそうに生返事をする。きっと、まだ半分眠つていて、意識もぼんやりしていることだろう。

「しゅりりは相変わらず、元気が良いねえ……」

身支度を整えたありすは、部屋のドアの入り口で、二人の様子を見てそのため息をついていた。

3人は、さつそく洞窟がある浜辺へと向かった。

耳に届くのは風と波の音。その洞窟は海の近くにある。静かな海は、何十億年もの間、絶えることなく大地に打ち寄せていた。生命が絶滅しようと、魔法大戦が勃発しようと、魔王が現れようと決して変わることなく。

「確かに、変な声が聞こえるわね」

ありすは言う。

「よ〜ん」と、確かに、時々聞こえる変な声。

「こ、こわいよ」

アトリスの兜についたふさふさが小刻みに揺れていた。

「さあ、行つてみよう!」

しゅりるりは、相の変わらず暢気な声で先に進む。

洞窟は自然が作り出した迷路である。奥へ奥へと進んでいく。ところどころから差し込む日の光、それに照らされ、湧き水がビロードのように滑らかな光沢の道を作り出している。

「……ようん」

その声は、もつと奥から聞こえる。

洞窟の人が歩いていける一番奥にある地下湖に、くぢらがいた。「ようん」と啼いている。本来なら癒しも与えると言うその声が、洞窟を抜けるうちに恐ろしい音に変化してしまったようだ。

「嫌だようん」

くぢらはそう言っている。何かに付きまとわれているらしい。確かに、くぢらの近くに魔物の姿が見えた。それは見覚えのある魔物であった。

「そんな事いわれても困るようん、オマイちゃん」

悪魔飴、という人名には聞き覚えがあった。悪魔飴は、確か海に落ちたはずである。

「ナンデー？ どうしてー？ そしてチャン付けするなあ！」

悪魔飴相変わらず特徴的な口調である。見た感じでは悪魔飴は無傷でかなり元気なようだ。さすが魔物。

「生きていたんだね」アトリスは、つぶやいた。

「意外と丈夫だね」しゅりるりも、そつと囁いた。

「まあ、魔物だし」ありすは、もつともなことを言う。

3人に安堵とも、がっかりともいえる感情が浮かんでいた。そして、くぢらと悪魔飴の会話をもう少し、岩陰から聞くことにした。状況がまだつかめていなかったのだ。

「君を乗せて、海を渡る気はないよーん」

このくぢらは、悪魔飴を煩わしく思っている様子である。

「ケチ、ケチんぼ」

玩具屋の近くで駄々をこねている子供と寸分たりとも変わらない行為をしている。

「ノリタイ、ノリタイ、ノリタイの〜」

ただ単に、くぢらに乗りたかっただけのようだ。

「だから嫌だよーん」

くぢらと悪魔飴の会話は無限ループしていた。それが早朝からずっと続いていたらしい。くぢらに疲労の陰りがみえた。

「そろそろ、行こうか？」

しゅりるりは、二人に同意を求める。

「そうね」

「くぢらさん、かわいそうだし」

3人は隠れるのをやめ、岩陰から現れた。

「そこまでだ！」

しゅりるりは、正義の味方が現れるときによく使われるフレーズを叫んだ。

「うわ、こんなとこまで、人間がきた〜」

悪魔飴は新たな侵入者に気がついたようだ。両の手を大きく開き、一歩程ひよんと後ずさる。いちいちリアクションが大きい。そんなおおげさな驚きのポーズをする。

「ナンだ、ナンだ？ ジャマするのか？」

そして悪魔飴は、しゅりるり、アトリス、ありすの順に視線を移した。

「こっちは1人、あっちは3人。1対3。ひ、ヒキヨーだぞー！ 万事休す」

悪魔飴は、懷から急須を取り出した。

湯呑にお茶を注ぐと、あたりに、その香りが広まった。

悪魔飴は、お茶を一気に飲み込んだ。

どうやら、お茶の効果により落ち着いたようだ。

「さてとー落ち着いたところで。いくぞー」

悪魔飴は、身構えた。

お茶を飲み、精神ともにすっきりした悪魔飴は不敵な笑みを浮かべている。

「……と、み、せ、か、け、て……」

悪魔飴は背中を向けた。

「やっぱりー、このジョウキョウは、サイアクだー。トソー！」

悪魔飴はそのまま、走り去った。翻る外套だけが優雅に舞い、それがさらに悪魔飴の行動を滑稽なものにしている。

「助けてくれて、ありがとーん」

この事件は、あっさり片がついたのでした。

外伝1・かくれんぼ

ここは魔王城。

名もなき魔物は探し回る。魔王の命により、また会議を「鯨に乗りたい」と言つてすつぽかし、そして、そのことについて叱られるのが嫌で隠れている悪魔飴を探している。

「よりによって」

魔物は、深く息をはいた。魔王様の命とはいえ、何であんなやつを探さなくてはいけないのか。名も無き下っ端の魔物は、またため息をついた。

「魔王様もなんで……あんな奴より、俺のほうが絶対役に立つのに」

魔物は、悪魔飴が隠れていそうな場所で誘う言葉を言う。

「ほおら、氷菓子だよ。早く出てこないと溶けちゃうぞ」

お菓子の類には、目がない悪魔飴のこと、何らかの反応があるに違いない。

すこし、沈黙が続いた後。

「コンドこそ、ひっかからないぞ!! わあい」と、でてきたところをつかまえる、そういう寸胆だな! ふふふ」

「す、すんたん……?」

魔物は思う。魂胆か寸法の間違いだな。

「ハヤク、向こうへ行け」

小声とはいえ悪魔飴の声の波長は、いついかなるときでもよく響く。そして、悪魔飴は声が出ていることに悪魔飴はまったく気づいていない。

(どんなに上手に隠れても、樽の中から聞こえるよ)

魔物は、樽を覗き込む。

「ほおら、見つけた」

「！！」悪魔飴は「あ」に濁点をつけた。

「うにゃあああ、ユルシテ」

頭を抱えて、丸くなる悪魔飴を可愛いと思っては駄目であった。
ここはしっかりしなくては！

名も無き魔物は、気を引き締めた。

「どうして、こう、いつも落ち着きがないんだ？」

魔物は叱り付ける。

「しょうがないよ。ちゅーいりよく、漫散なんだから！！」

「まんさん……？」

魔物と思う。それをいうなら、散漫だろう。それに、注意力ではなく、集中力だ！こいつは、何を言っても駄目だ。魔物は首を振った。

今日も、魔王城は、平和です。

5・妖しい美しさの秘密……

海の向こうから来たという人が、恐ろしい魔物について話していた。

「海を東に行くと、派手な塔がアル。そこには、美しくもおそろしい魔物がいるらしいアル。何人もの旅人が倒しに向かったが、戻ってきた者は魂を抜かれたように、誰も何も言わないアルよ。ちょっと不気味アル」

その話を盗み聞きしていたしゅりるは、いつもの仲間に報告する。

「勇者、勇者！ 勇者なら行くべきだよ」

「う、うん」

「やっぱり勇者は消極的だねえ」

例によっていつものように、こんな感じで冒険が始まったのだ。

海を渡って魔物がいるという塔へ向かった。中はちょっとした迷路になっていたが、複雑というものではなく、冒険になれた者ならば難なく進めるものだった。

何度目かの角を曲がろうとした時、廊下の先の道から聞き覚えのある声が聞こえた。それは悪魔飴の声だ。悪魔飴は「迷ったー」と言っているようだ。

細身・長身・冷血系のクールな美形3拍子のような外見とは裏腹に、大変賑やかなのですぐその存在が分かる。悪魔飴に気がつかれると精神的に疲労してくるので、遠回りになるが別の道を行くことにした。

そのようなちょっとした回り道はあったものの、罫も仕掛けもない道、割とすんなり魔物の場所へたどり着いた。

塔の最上階、壁紙、天井、床がピンク色で統一された少し可愛いような不気味なような部屋に、1匹の魔物がいた。化粧台の鏡に夢中で、こちらに気づいていないようだ。

「お前が美しい魔物か？」しゅりるりは、言う。

「ん？ だれ？ 美しいだなんて、本当のこと言わないでえん」

くねくねと腰をくねらせて、奇妙な音程の声を発しながら振り向いた。声はとにかく、艶やかで滑らかな肌、さらりとした髪の毛、煌めく瞳、外見は非常にきらびやかで美しかった。

「確かに美しいけど」

「……おかま？」

「オカマなんて失礼ね。私はレリナ。こう見えても魔王様に仕える四天王の一人なんだから。今後ともよろしくね」

マスカラで非常に長くなったまぶたから、大きなハートやら星が飛んできそうなウイंकが飛んできた。なんだか、ちょっと扱いづらい魔物だ。

「やっとついた！」

と、背後から、息を切らせた声が聞こえた。

「って、また、オマエラかあ！」

こんなタイミングで、ややこしいのが来た。

「あら、悪魔飴ちゃんじゃないの？ 相変わらず方向音痴のようね、同じ道を何回も通っていたわよ」

悪魔飴は頭を抱えた。

「好きで迷っているんじゃないもん！！ それにチャン付けするなあ！ ああ、あれも、これも忌まわしいオマエラのせいだ」

悪魔飴は勇者たちを指差した。なんだか言われもないとぼつちりを受けた。

それにしても、一つ一つの動きが大袈裟である。こんな行動ばかりしているのに、体力を消費しているように見えないのは、馴れと

いう物なのか違うのか。

「キミのソンザイは、キケンすぎるー。いまのうちにケシちゃうぞー」

悪魔飴は懷から黄色の布を取り出した。その布を慣れた手つきで左手に被せた。悪魔飴の顔にあの笑みはない。悪魔飴がどんな行動に出るのか、誰にも予測できない。3人は身構えた。真剣なまなざし、悪魔飴は本気だ。

しかし、それにしても悪魔飴のその格好は奇術師スタイルそのものである。鳩が出てこようものなら、拍手してしまうかもしれない。真剣なまなかつた。

「『モンスター』があらわれた！」

黄色の布を右手で摘み上げるとそこに、何か居た。取り出したのは、なんと二匹の白い小さな鼠であつた。茶色の斑がある。二匹の鼠は鼻を小刻みに震わせ、辺りを覗っている。

「ハムスに、スター。なんでー、君たちをこんなトコロに仕込んだおぼえは、ナイぞー」

二匹の鼠を左手に慌てている。本当は違うものを出すつもりだつたらしい。

「コツチかー」

悪魔飴はふいに右手をあげた。すると白い鳩が出てきた。

「平和の象徴、白い鳩と言うことで……こんかいも、トーソー！チャララーン！」

悪魔飴は残像を残し消えさつた。相変わらずわけのわからない奴である。

「それにしても、ハムスと、スター……って、一体」

ありすは、ついつい口に出していつてしまう。

今回分かったことは、悪魔飴は奇術が趣味で、鼠を二匹飼っている。

る事だ。悪魔飴に関する資料は^{データ}どうでもいい事ばかり増えていく。

「あらあら、相変わらずおかしい子ね、オマイちゃんは……何しに来たのかしら」

確かに何か用があつてここに来たはずなのに、手品を披露したただけで去ってしまったのだ。

「まあ、いいわ。あとでまた来るでしょう。また迷いながら来るのかしら？」

変な嵐が過ぎ去ったので、仕切りなおすことにした。

「勇者、勇者、仕切りなおしの台詞、台詞」

「と、ところでこんなところで何をしているのさ？」

しゅりるりに促され、アトリスは思いついた台詞を言う。

「うふふ。私の美貌で世界中の者を僕にするべく頑張っているのです」

レリナの奇妙な動きは激しさを増す。

「そして、よくみれば好みの人間がいますわ。ぽっ」

レリナは勇者をじつと見ている。

「へ？」

「あなたは、もう私のものですわ」

レリナは、抱きつこうとする。

「あわわわ」

アトリスは、今まで見たこともないくらい俊敏な動きで、魔物を避けた。勇者の瞳が、助けを求めている。

「待った！ そんなことさせるかあ！」

しゅりるりは、嬉しそうに間に入る。

「うふふ、美しくてキュートな私の邪魔はさせません」

「勇者は渡さないぞ！」

「あらあら、焼いちゃうわ」

感情の全くこもっていない言葉で、ありすは、いつもどおり冷静だ。

「どちらが、勇者を手に入れるか勝負しましょう。うふふ、もちろんそちらは3人でできても良いわよ。人間はひとりでは弱いのを知っていますから」

闘いは死闘を極めた。

ある意味で。

アトリスに剣を向けられた時には、「いや〜ん、大胆」「もう、好きにして」と、それはもう恥らう乙女のように。そのたびに、アトリスの動きが止まり攻撃できなかった。この戦いの攻撃面において、勇者は全く役にたたなかった。

しかし魔物の方も、「ああ〜ん、愛しのお方にこうげきなんてできなあい」とアトリスに攻撃でいないでいたので、たまにアトリスを盾にした。

この戦いの防御面において、勇者は非常に役に立った。

そして後半になってくると、何も考えないように、無心で戦い続け、ついにレリナを倒した。

「あらあん、負けてしまいましたわ。世の中には強い殿方がいるのねえ」

よろよろと、起き上がるレリナ。もう戦う気はないらしい。

「アトリス様、私、ずっと待っていますわア。ほほほ。それでは、みなさん。また会いましょう」

レリナはウインクをしつつ、どこかへ行ってしまった。

「行っちゃった。おもしろい奴だったねえ」

しゅりるりは、アトリスに語りかける。

「変なのに好かれたあ」

アトリスには、誰の言葉も耳に入っていないようだ。

おまけ

塔にいったときの話は、触れてはいけない話題になり、美しくも、おそろしい魔物がいる塔は、不気味なまでに、謎のままであった。

6・穴掘り、地盤沈下

最近、町のあちこちが、地面に沈み込む事件が多発している。酷い所では、家が少し傾いていた。

それを調べるために町の近くにある洞窟を調べに行ったら、中で恐ろしい魔物を見たとか「魔王様のために」と、ものすごく音痴な歌が聞こえるとか、そういう噂で持ち切りになっていた。何者かが善からぬことを企んでいるのだろう。

この噂を耳にしたときから、アトリスはなんだかいやな予感がしていた。その予感どおり、にこにこしながら、しゅりりりがやってくるではありませんか。

「勇者、勇者。この事件、魔王の手の者のにおいがするゝ行こう、行こう」

「う、うん！」

「やっぱり、勇者は消極的ね」

そういうわけで、3人は洞窟に向かったのです。

洞窟は人の手によって彫られたものではなく、天然のものだ。一行は魔法で作り上げた灯りを持って、洞窟に潜る。この前、くぢらを助けた時の洞窟よりも深く暗く、このようなダンジョンらしい場所を探索できることで、しゅりりりはとても喜んでいた。

洞窟内は滑りやすく、地底深くに落ちることが出来る崖や穴がある。ちょっとした高さから落ちても、石筍が生えた床は、それだけでとても痛そうだ。落ちないように、気をつけなくてはならない。

洞窟内は蝙蝠の住処になっている。黒い蝙蝠がキキと音を発しながら、影から影へと飛び回っていた。

「なんかネズミっぽいのが、たくさんいる！　すごい！　飛んでいる！」

アトリスは、蝙蝠をこんなにも近くで見たことがないようだ。

「あなた、蝙蝠も知らないの？」

ありすは、呆れたように言う。

「本物は見たことがないんだ」

家に引きこもりつきり、夜もすぐに寝る生活を、少し前までしていたのだから、この夜の住人には馴染みがないのも仕方がない。無知とはなんてあどけないことだろう。

侵入者に驚き襲い来る蝙蝠たちを、適当に蹴散らしながら先へ進んでいく。

そして、なにやら蝙蝠以外にも、奇妙な音を発しているモノがこの先にも。

「ハネのはえたクロネズミだけのせかいだー。ほかにダレもいない、ナニもなーい」

蝙蝠のような金切り声が、聞こえてくる。

「だー！ おそーい！ なーにやっているのだろー、あいつはー。

まーさーかー、あなほりにムチューで、その他のことは、ガンチューになかったりしてー。がーん！」

暗闇に溶け込むような鴉色の服をまとった人物が、右往左往している。無駄な動作によって超音波を発しているのかもしれない。

「アンマリ奥に進むと、マヨウしなあ……」

意味も無く、右手を上げたり、下げたり、左手を上げたと思ったら、回していたり、どう見ても無駄な動作ばかりをしているように見えた。それは、遠くから見てもそれが誰なのか判ってしまうような、見覚えのある独特の陰である。あれは、どう見ても悪魔飴である。今回はどうがんばっても、避けようがない。仕方ないので、近づいた。その気配に、悪魔飴は振り向きながらしゃべりだす。

「ステイラ！ おーいーぞー！ はやく……？」

悪魔飴の動きが止まった。目線が、ゆっくりと3人に向けられる。
「うわー！ オマエラは」

悪魔飴は後退りした。勢いがつきすぎて、後ろの壁にぶつかった。鈍い音がした。本当に勢いよくぶつかったようだ。

「イデー」

悪魔飴は後頭部を押さえる。痛いですむような音ではないように思えたのだが、悪魔飴は人間ではないので、そこは丈夫に出来ているのかもしれない。

「オマエらは……」悪魔飴は、気を取り直して言う。「ダレだっけー？ 分からないけど、なんか知っている人っぽいから、キミたちでもいいや、伝言たのまれてくれる？ ハヤク来て〜って、アラシヤに伝えておいて。多分、この先にいると思うんだけど」

後頭部強打により、ほんのささやかな記憶喪失、記憶の混乱。

「はやく〜はやく〜」

悪魔飴は催促する。この際だから、従ったほうが良いのかもしれない。

悪魔飴と別れ、だいぶ深いところまで、降りてきた。地上の明かりはもう、全く届いていない。水が澄んだ道を造っている。それに陰を移しながら進んでいく。

すると耳が無駄に良い、しゅりるりが立ち止まる。

「こ、れ、は、魔物の気配、」と言うか、歌。気をつけて近くにいろよ」

もう少し下ったところに、横穴がある。その中から全ての音が聞こえてくるようだ。

横穴を覗き込んだ。歌が聞こえてくる。

「邪狗様の命令で、あの町を地盤沈下で滅ぼすのさ。町は破壊するためにあるのだ」

見たことのない魔物が、歌を歌いながら両腕を振り回している。遺跡を構成する石壁を崩している。よく見れば、その指には、湾曲

した鉤爪がついていた。

「あいつが悪魔飴の言っていたアラシヤかなあ。うう、大きいなあ」
今までになく、魔物らしい魔物にアトリスは怖気づく。

「そうみたいだね、伝言と伝えとく？　そして帰っちゃう？」

しゅりるりは嬉々としている。このままだと、本当に伝言を伝えておしまいになりかねない。

ありすは、しゅりるりを落착させる。

「いや、それが目的では、ないでしょうに……でも、なんとかならないかしら」

明かりも満足に無い不鮮明な、かつ、不安定な狭い足場という地形は、戦闘には不向きであった。

「ありすは、まじめだなあ……」

これは、アトリスが言ったものか、しゅりるりが言ったものか、この暗闇、この囁き声のなかでは分からない。

「いい考えが思いついた、任せて！」

しゅりるりは笑顔だ。いたづらっ子の輝く笑みを浮かべた。そういう笑顔をする時は、決まってなにかこう……ろくな事がおきない。「さて耳を貸して」

しゅりるりは思いついた作戦を実行にうつす。

「……あの魔物。かわいそうに……」

しゅりるりの作戦通り、3人は横穴に入った。アトリスは最後尾で震えている。やはりこの戦いでは、役に立ちそうにない。

「こんなん、本当に大丈夫なのかしら」

ありすは呟いた。

横穴は光に照らされる。魔物が光に気が付いた。

「なんだー。おまえはー四天王の一人このアラシヤ様の邪魔をする

のか？」

「うん、邪魔しにきた」

相変わらず、しゅりるりはノリが軽い。

アラシヤは、場違いの空気に少し怯んだが、

「人間だろうとなかろうと、殺してやル、一番ひよろつこいお前から覚悟しな！」

鎌状の鉤爪が問答無用で、しゅりるりに襲いかかる。

しゅりるりは、条件反射により、「わは」と言いつつ、頭を抱えしゃがみ込んだ。鉤爪は上をかすめ、壁に突き刺さった。その隙に腹這いで脚の下をくぐる。アラシヤはそれを見逃さない。すぐさま次の行動に移った。

爪がしゅりるりめがけて、突き刺さる。

飛沫があがった。

が、しかし、それはそう見えただけであつた。

しかし、そこには何もなかった。

「危ないなあ、普通の人間だったら、死んでるよ」

あのような凶器を、真正面から受けていたら、壁と同じように、塵や埃のように細かくなっていただろう。

「どこだ、どこいった？」

アラシヤの背後に、逆さに浮かぶしゅりるりはケラケラ笑っている。

「うしろか？」

しかし、爪は空をきつただけだつた。

「こしゃくな真似を！」

ひよろつとした奴は、とらえどころがない。アラシヤは気を取り直し、震えるアトリスに突進する。この怯えたやつなら。

しかし、次の瞬間、血を流しているのは、アラシヤであつた。背中には剣が刺さっていた。

「これは」

それは、アトリスの持っていた剣である。

「な、何がおきた？ あの震えていた奴が、避けつつ刺したとも言うのか」

アラシヤはわからない。自分がなぜ血を流しているのか。

「覚悟はいい？」

困惑しているアラシヤの前に、突然、目の前にありすが現れた。

アラシヤは完全に不意をつかれた。そして、このときを待っていたのごとく炎の魔法が炸裂する。

炎の魔法は直撃し、あたりに焦げの臭いを感じさせた。アラシヤは炎の熱に体を焼かれながらも反撃しかけ、ありすを切り裂こうとした。

「……自分が切りさかれそうになるのを見るのは、あまりいい気分ではないねえ」

切り裂く爪の先から消え行く自分の虚像を見て、ありすは言う。

アラシヤは、ずっと空気と戦っていた。

アラシヤが見ていた3人の姿は、最初から水に映った幻だった。魔法の有効範囲外から見たら、アラシヤが、へたくそな踊りを踊っているように手を振りかざし、足を鳴らし、見ていてなかなか滑稽だろう。

「最初、しゅりりり……やられたかと、思っちゃったよ」

岩の陰で経緯を見守っていたアトリスは、囁いていた。

「任せて、と言うから行ってもらったけれど……」

アトリスは、まだ声が震えている。

「しゅりりりのことだから、仮に死んでも、倒れているのが暇だからと言って、生き返りそうだけれどね」

ありすは、たいして心配もしていなかったようだ。

いつ、どこから、しゅりるりの幻劇場が始まっていたのか、それは分からなかったが。

「あの手の魔法をしゅりるりに使わせたら、最後、相手は翻弄されて、弄ばれて終わり……右に出るものはいないね」

魔法を知っているありすでさえ、しゅりるりがいつ幻と入れ替わったのか、つまり、いつその魔法が発動したのかわからなかった。しゅりるりが魔物に近づき声をかけたその時、気がついたその時には、幻のアトリスとありすが、幻のしゅりるりのまわりにいたのだから。

「敵には、回したくないね」

アトリスは、言う。

「あつはは、なんか、ひどい言われよう」

幻に姿を隠していたしゅりるりが、いつの間にか戻ってきていたらしい。

ありすは思う。

もしかしたら、目の前にいるモノ、そこには実は何もいなくて、本当はどこか遠いところで全てを見て、笑っているのではないかとこの冒険がはじまった時から、そこにいもしない幻と旅をして来たのではないかと。

「十分ありうりるから、怖ろしいわ」

ふとしゅりるりが、上を見る。どこまでも暗い。地上の光も見えない。

「あ、なんか、面白いことが上から落ちてくる予感」
しかし、何かを感じたようだ。

「ちょこつと、空間をいじって……」

しゅりるりは、呪文を唱える。

すると、アラシヤの上に影が出来る。

「そこか？」

はつきりとした気配に、アラシヤが一步を踏み出した、その時である。

「ぬお！」

「わ！」

なんて、タイミング！

悪魔飴が上から降りてきた。いや、落ちてきたといったほうが正確だ。アラシヤと悪魔飴とぶつかった。奇妙な悲鳴が二つ響いた。それにしても悪魔飴の丈夫さは、アラシヤの上をいつていたようだ。アラシヤはピクリとも動かないのに対し、悪魔飴は何事もなかったかのように、黒外套に付着した土埃を払う。

「イテテー。ふう」

とくにダメージを受けた様子のない悪魔飴は言う。丈夫だ、丈夫過ぎる体だ。

「ナカナカ誰も来ないし、マヨツテ、シマツテ、やけになって、穴に落ちてミレバ……」

彼は、着地という行為について考えたことはあるのだろうか。

「ああ、アラシヤ！ ナンテひどい姿に！」

悪魔飴は目の前にいる、無残な塊に気がついた。

「……そうか、アラシヤを、コンナ風にしたのは、お前たちの仕業か！」

「とどめの原因は、あなただから……」

いや、アラシヤの上に悪魔飴を移動させたのは、しゅりるりだから、正確にはしゅりるりなのかもしれないが。

しかし、どちらにしろ、物理的な本当のとどめは悪魔飴が落下してきたことなのである。

「むむむ、ナンカ体の調子が悪いし、アラシャはボロボロだし、今日のところは見逃してヤル」

悪魔飴の手の平に、光が集まりだす。そして悪魔飴とアラシャを包みだす。

「では、このへんで、チャラララン」

魔物たちは消え去った。

場所移動の魔法を使えるのだから、かなりの魔力の持ち主なのだろうが、実力が行動に追いついていないのは、こういうことを言うのだろう。

「いっちゃった」

アトリスは思いがけない結果に、目を瞬きさせている。

「それにしても、よく落ちる子だね」

しゅりるりは、言う。

「なんだか、壮大なコントに付き合っている気分になってきたわ」
「ありすは、頭を抱えていた。」

7・対決！カボチャ団！

「カボチャを狙う魔王の組織が、あつて困っているんだ。詳しいことは分らないのが事実だが、いくつかの畑が被害にあった。このままでは、みんなの台所にカボチャが届かなくなってしまう」

3人は、畑にいるおじさんから話を聞いている。

「カボチャを狙う組織。一体どんなやつらなんだろう。怖いなあ」

「カボチャだけを狙うって、何をしたいのやら」

「あはは、面白そうな人たちだね。どんな些細な悪事でも魔王が関わっているなら勇者の出番、懲らしめに行かなきゃ」

3人は、それぞれの感想を言った。

「その悪の組織は、カボチャ団という名前で決定だね」
しゅりるりは、言う。

その夜、畑の前で待ち伏せる3人。月明かりだけがたよりだった。
「どうしてこう、魔王は町中に現れるのかしら」

ありすは思ったことを言う。

「駆け出しの頃は、基地とか、お城なんて構えられるほどの財産ないからね。どうしても飛び込み営業的な活動になるんだよ」

「そういうものなのかしら」

もつともらしい、しゅりるりの意見に納得しそうになっているあ
りすがいた。

「眠い」

アトリスは、そんなことはどうでも良かった。早く帰って暖かな
布団で眠りたかった。

「お。怪しい者、発見！」

目のいいしゅりるりは、畑に侵入する集団を見逃さなかった。す
かさず集団の前に飛び出した。

「ああ、しゅりるりはいつも、後先考えないで飛び出すんだから
ありすはそのあとを追う。」

「待ちたまえ、あやしい集団！」

しゅりるりは嬉々として、手足を広げて行く手をさえぎるように
立つ。

「我々は、怪しいものではない！我々は影集団『失樂園』だ！」

思いがけない邪魔者に、集団は待っていましたとばかりに3列に
並び、前々から練習していたであろう、決めポーズ的なモノをみん
なしている。

「怪しいにもほどがあるわ」

暗闇で人間の目には、その決めポーズはまったく見えないが、普
通ではない雰囲気要充分伝わってくる。

「あはは、カボチャ団、格好いい！ 格好いい！ あはははは、」
しゅりるりの笑いのツボに入ってしまったようだ。今にも笑い転
げそうだ。

「我々は、そのような名前ではない！」

しゅりるりは、まだ「カボチャ団、カボチャ団」と連発してい
る。

「む。む。」

魔王はしゅりるりを無視することに決めた。

「私は、魔王アンキ」名を名乗った。「さて、私は忙しいのでな、
貴様らの相手は」

アンキが合図を送ると、3人の手下が前に出る。

「3対3で、公平に、な」

さりげないやさしさ、律儀さ。

しかし、3対3で同じ人数での対決ではあるが、手下はやはり手
下でしかなく、下っ端なのであつという間に決着がつく。それでも

足止めの時間的には充分だったらしい。

「くつくくつつ、かぼちゃは、いただいていくぞ！」

手下を徹底的に傷だらけにしている間に、アンキはカボチャをいくつか抱えていた。カボチャを手にとると、手下とともに、さつさと逃走を図る。

「あ、逃げるのか？カボチャ団！　まてー」

しゅりるりはわくわくしながら、アトリスとありすは仕方なく、カボチャ団のあとを追いかけた。

「さつさと逃げるなんて、魔王の風上にも置けないやつだなあ……もう！」

珍しく怒っているのかもしれないが、嬉々として追いかけているので、本当のところはどうでもいいのかもしれない。

岬の先まで追い詰めた。

この先は海だ。逃げ場はない。

「ふつ、ここまで追ってくるとは」

落ち着きを払って、ふりむく。逃げる道を間違えたとは、今更言えない。

「食卓の明日を守らなくては。カボチャの無い台所には、させない！」

しゅりるりは正義の味方が、よくするように人差し指を立てる。

ポーズは格好良いのだが、言っている内容が奇妙な感じで、燃える展開と言うヤツに、いまひとつ及ばない。そして、アトリスとありすは、もはや完全に置いてけぼりである。

なにはともあれ戦闘は避けられない。

「よし、いくぞー」

先手をきいたのは魔王アンキである。

「アンキクラッシュー!!」

しかし、見えない壁に阻まれ攻撃は届かなかった。

「こ、攻撃がきかない……?」

これがアンキの使える最高の技なのだ。

「も、もう一度だ! アンキクラッシュー!!」

しかし、同じ結果に終わった。どうやら魔法の効果で、3人には物理的な攻撃は効かないようだ。

「ぐ、こうなったら」

アンキは両手を地についた。

そしてこう叫んだ!

「……ごめんなさい、見逃してください、カボチャは返します」

アンキは、魔王の癖に魔法が使えなかったのだ。

こうして、長かった戦いは幕を閉じた。

「これで、終わったね。綺麗な夕日だ」しゅりるりは言った。

3人は、沈みいく太陽を見つめる。

「いや、あれは朝日……それに、私は太陽なんて見つめてないわ」
ありすは、ナレーションにも突っ込む。

「そう、これからがはじまりなんだよ、これからが、本当の戦いなんだ」

しゅりるりは、締めくくりの言葉を言う。

海の水平線に顔を出す太陽の光によって、染まった空は、明るく

輝いていた。

偽次回予告

「魔王って、いったい何なのかしら」

前回の町にいたあの魔王（自称）と言い、今回の魔王といい何か間違っている気がした。

「じゃあ、引退した魔王のところにも行つて、魔王とは何たるか！を聞きに行く？」

アトリスとありすは、全力で遠慮した。

外伝2・銅貨はどうかしら？

ここは魔王城。

たくさん魔物がいる。彼ら魔物たちが魔王城の平和を守っている。

最近急成長中の勇者一行の動向も大切だが、城の中にはもうひとつ動向を把握しておかなくてはなら無いものがある。それは悪魔飴の所在と行動。魔王からは「好きにやらせておけ」と命が出てはいるのだが、城の魔物にとっては、いつ来るか分からない勇者たちよりも気をつけるべき存在だった。

鴉色の服を着ている魔物。背も高く顔も割りと思えない。魔物の間でも、人気の高い容姿なのだが、それは何もしていなければの話。動いている間は、もはや小動物か子供のよう。

今日もあわただしい城内。そのあわただしさの中心には、大抵同じ人物が絡んでいる。みんなのアイドル（？）悪魔飴である。

その悪魔飴と名も無き魔物Aが、なにやら話している。

「この銅貨は、すごいんだぜ？」

なにやら立派な建築物の絵がかかっている銅貨を、魔物Aは悪魔飴に見せているのだ。人間の世界で流通している銅貨で大して珍しいモノではない。

「この銅貨の建物の扉、見えるよな？この扉が、なんと、とじたり、しまったりするんだよ！」

「え！ ホント？」

悪魔飴はじつと銅貨を見つめる。

しかし何も変化がおきない。

「トジたり、シマツたりしないよ！ピクリともうごかないよ！」
魔物Aは、くすりつと笑うとタネを教えた。

——その数分後。

「ねえ、ねえ、このドーカ、すごいよ」

悪魔飴はさつき教えてもらったネタを、名も無き魔物Bに見せようと銅貨を手渡す。

「コレに書いてあるタテモノのトビラ、トジたりシマツたりするんだよ！」

「とじたり……しまつたり……？」

魔物Bは思う。閉じること閉まること、それは、同じだろうと。

「おまえ……こんなバカなことがすきなのか？」

魔物Bは言う。

「十人十色、十二単っていうじゃないか。人ソレゾレ違つてことさ。」

悪魔飴は、えっへんとする。

魔物Bは思う。

（意味が分からない……何か間違っている、根本的に）

しかし、みな煩わしいと思っても、誰も悪魔飴をなぜか憎めない。ある意味で、この城の主よりも愛されているのかもしれない。無邪気な人懐っこいこの性格が、そうさせているのか、違うのか。いつかはやってくるであろう勇者も気にはなるが、しかしまったく危機感の無い魔王城。

今日も、本当に平和です。

8・希望に満ちた世界に幸いを。

世界には、魔王も多いがそれ以上に遺跡も多い。前回は何も手に入れた物は無かったが、今回行くところはどうかなることやら。

「うう、なんか面倒くさいなあ、暑いし」

アトリスは猫背になりながら、最後尾を歩いている。周りは樹々の密集地帯、湿度も気温も高いのだ。

「もうすぐ着くはずだよ」

しゅりるりは、『ザ・古代の遺跡（下）』と言う本を片手に言う。
「本に紹介されている遺跡に行ってもねえ」

あまり期待はしないほうが良いだろう。

そんな密林を歩くこと数時間、遺跡が姿を現した。人が踏み入れることがほとんど無い場所にある遺跡は、自然の手によって地に還るのを待っているだけなのである。

「それにしても立派な遺跡ねえ。いつの時代のものかしら」

ありすは、見慣れない形式の建築に少し興味を持ったようだ。

「魔道の道具の黎明期の頃のものだからね、ありすは、勉強になることもあると思うよ」

遺跡の入り口の扉は、幾何学的な紋章が対称に描かれている。昔は魔術的な力で、人を感じると勝手に開いたのだろうが、今は開かない。ツタや木の根にも覆われていて、簡単には開けられそうにない。

「この植物たちを燃やして、扉を壊してもいいんだけど」

しゅりるりなら、やりかねない。

「まあ、さっき、ちらっと見たんだけど、あっちに盗掘した人が空けたらしき入り口があったんだけどね」

目の良いしゅりり、目ざとい視力のよさ。

「盗掘って、また何も無い遺跡のような気がしてきたわ」

ありすは暑さとは違った、頭のくらくらを感じてきた。

「まあ、でも、せっかく、ここまできたんだから、見ていくだけでもいいかしら」

遺跡が嫌いではないありすは、すぐに前向きになる。

盗掘者の穴は、だいぶ昔のものらしい。木の根が崩落を防ぐかのようにしっかりと、草木の浸食が激しい。

木の根に覆われた入り口をくぐり、梯子の変わりに根を伝い、石の床に降りる。鏡のように姿が映る透明色の壁、黒い床、合間から覗く光の柱。外の蒸し暑さを忘れそうなくらい、凍りつきそうなほど透き通った空間。人工的な造り、彫刻、遺跡の内部は、外とはまったく異なった雰囲気。

3人は、しばらく誰も何も言わず歩く。気軽にしゃべれるような雰囲気ではないのだ。何年も何十年も、動かない時の流れが、沈黙の音しか許さない。

最終的に行き着いた先は、少し広めの部屋で行き止まりだった。上の方に入り口のようなものが見えるが、壁を登って行けそうな場所ではないし、階段のようなものも無い。あるとすれば右手の宙に浮かぶ石。それが怪しい。それには、うつすらと魔方陣が描いてある。刻まれている幾何学的な模様は、上に移動するための物であることを示していた。

「これは、あそこへ移動するための装置ね」

ありすは言う。魔法を学ぶものとしては、魔方陣の解説は基本的な知識なのだ。

「そうだね、あの村にあったやつは昔版の転送装置だね」

しゅりるりも魔方阵の解読はできるようだ。

こういう類のモノは触れると、その魔力が発動するのだ。

「ていっ」

しゅりるりは、ぺちつと右手で触れてみる。

空間が縦に伸び、横に伸び、そして渦を巻き、空間の歪みと共に浮遊感が襲って……こない？

触れてもまったく反応しなかった。

「むう、昔のものだからね。魔力切れ？」

遺跡探索では、良くあることだ。

「まあ、上に移動するだけだし」

しゅりるりは宙に浮き、当たり前のように飛んでいこうとする。

「待つて、私たちは飛べないのよ」

勇者と魔術師は飛べない。置いていかれている。

「おおっと、いつもの癖で……んゝ困ったなあ。他人を『安全に』宙に浮かせる魔法は、忘れちゃったんだよねえ……それでもいいなら」

しゅりるりは、その魔法を唱えようとする。

「だめだめだめええ」

アトリスは、高所恐怖症気味なので、即座に声を上げた。

「私も遠慮しておくわ」

ありすも即座に断った。

地上に降りたしゅりるりは、少し考える。

「しょうがないな……」

しゅりるりは、再び石に触れる。多少の魔法陣構築についての知識があるので、無理やり動かそうと考えたのだ。

「昔の型だから、仕組みは簡単♪ 何とかなりそう♪」

光る文字を次々に。魔方陣に新たな模様を付け加えていく。

「ここの回線を切って、手動発魔に切り替えてつと……」

輝く美しい造形の文字を、どうでもいい落書のような速さで描き足していく。

しかし、こんなにも真面目に取り組む、しゅりるりを初めて見る。「私も構築の基礎はわかっているつもりだったけれど、勉強になるわぁ」

ありすもそれを見て、感心する。

魔術師の卵ということもあって、魔方陣とその改造の様子は興味深いものらしい。時々、ありすも提案し、二人で、作業している。

魔法というものに全く関われないアトリスは、暇なので自分の荷物を枕にした。

「終ったら、起こして」

スキル『いつでも、どこでも眠れる』を使い、アトリスは、すぐに寝息をたてる。暇さえあれば、眠っているのです、まあ、いつもどおりである。

—— 幾らかの時間がたって。

「魔方陣を刻むなんて、久しぶりで楽しくなっちゃったよ」

「しゅりるりだったら、いろいろ無駄な機能付け加えるんだもの」

余計に時間がかかってしまった。

「あはは♪ 無駄に暗証番号機能つけちゃったしね。しかも、間違

うと入り口に飛ばされるの。」

つまり、この装置に暗証番号を知らない人々が触れたならば、延々、入り口に戻ってしまふのだ。

「うわぁ、極悪」

アトリスはつぶやいた。

「大丈夫、簡単にはれる様に暗証番号は特に保護しないで、内部に書き込んであるから、魔法に詳しい人がいたら、すぐに解除できるよ」

「そうだといんだけどね」

からかいというには、やりすぎな様々な仕掛けを組み込んでいるのを、ありすは見ているので、なんともいえない表情をしている。

何はともあれ、今度は魔方陣は正しく発動した。しかし、何事も無くというわけにはいかなかった。問題がひとつだけあった。

アトリスが、ふらふらだ。

転送酔いをしたアトリスの回復を待つて、3人は出発したのでした。

「つまり、この先は誰も来ていない可能性があるって事だよな？」
続く廊下を、まだちょっと気持ち悪そうなアトリスは言う。

「そうね。あの転送の石が、停止する前に人が来ていなければ、だけれど」

「あと、空を飛べる人や、ロッククライマーが来ていない事を祈るだけだね」

あらゆる可能性を考えている点では同じだが、ベクトルの違う二人の意見。

「誰も来ていない可能性がある以上、罠には、気をつけないといけないわ」

ありすは、そう言い終わらないうちに、何か音がした。そちらのほうを見てみると、アトリスが慌てている。

「い、今、何か踏んじやった」

床に隠されていた何かのスイッチ踏んでいた。

「言っているそばから、罨ね」

しかし何もおきなかった。何も起きる気配が無い。

「ん、きつと歯車がさび付いているとか、木が腐ったとか、もうすでに誰かが、かかってしまった後で、そのまんま仕掛け直す人がいなかったか」

何せ古い遺跡なのだ、罨が老化で動かないこともあるう。

「拍子抜けしちゃうわ、本当に」

像があり、石碑がある立派な場所に出た。

『この地に巢食う闇の者、光に守られし勇者の手により魔の脅威は去り、……云々』

石碑には、こう書かれている。

「ここ昔魔王の城だったの？」

アトリスは、少しおびえているようだ。

「そうだね、でも、その後、勇者記念館になったみたい。この時代は魔王が世界にとって、本当に脅威だった時代だから……」

この頃の魔王は数十年、もしくは数百年に一人の周期でしか、現れないほど人気の無い……いや、本当に選ばれた強さのものしかない職業だったのだ。

「ここは勇者に縁がある地みたいね。この勇者はアトリスのご先祖様かしら？」

「勇者の家系は、もとはひとつだから、直接の先祖でなくとも、同じ勇者の血はついにいると思うよ」

「ボクの先祖様の」

アトリスは思い出す。そういえば自分は勇者の血を一応引いていたのだと。

「この箱みたいなモノは？」

宝箱とは違うようだが、石の箱のようなものが像の土台に置いてあった。

小さな石の箱。

調べてみると罫はないようだ。しかし、しゅりるりが開こうとしても、開かない。なにか魔法的なもので、鍵がかけられているようだ。

「この手の封印は、解くのが面倒なんだよね。『想い』という最強で複雑な魔法がかかっているから」
しゅりるりも、お手上げみたいだ。

「開かないんだ」

罫がないと分かり、アトリスは箱に触れる。と、アトリスが触れた途端、箱は聞き慣れない歯車の音を立てる。

「わわわあ、罫はないって言ったじゃん、うわわわあん」
慌てるアトリス。

「罫じゃないよ。魔法が解けているんだよ。勇者にゆかりのある場所だもの、勇者ならねえ。さすが勇者の血。勇者の特権だね。勇者の血は、解けない呪いみたいなものだから、鍵には丁度よかったのかな」

表現がおかしいが、的は射てるような気がする。

箱に勇者の紋章が浮かび、蓋が勝手に開いていく。

さて、何が入っているのか。

「からっぽだ」

アトリスは言う。

期待に反して、箱の中には何も入っていなかった。しかし、なんだかありきたりな文字が、光の文字が箱の蓋の裏側に刻まれている。「わが子孫へ。ここまでくるのに、大切なものを君は得た……云々」ほかに、何も無かった。

アトリスは期待させておいて、この結果に、がっかりな様子だ。

「まあ、たとえ中身があつたとしても、すばらしい魔具で無い限り、さびたり、風化したりしているからね。何か残っていただけでも、良かったんじゃない？」

「そうよ、何も残ってないよりは、断然いいわ」

しゅりるりと、ありすは残念そうなアトリスを慰める。

「そうかあ」

魔法を普段から扱っているありすとしゅりるりは、感じる事ができたが、魔力を持たないアトリスがそれに気がついたかどうか。

箱の中に入っていた微かに残る思念が、幸いの祈りを、希望の魔法を、恵みの祝福をアトリスに与えていた。

『希望に満ちた世界に幸いを』

9・ネコ仮面現る！

今3人は、地下深くに作られた広場にいる。周りには背の丈ほどの岩が立ち並んでいる。

噂を聞く限り、ここに住む魔王が良からぬ動きをしているらしい。世界征服を企んでいる魔王と手を組んだらしいのだ。しゅりるりは世界征服をたくらむ魔王を倒しに行くという、当初の目的をすっかり忘れかけていたのだが、ここに来て久しぶりに思い出したのだ。

しゅりるりは、なにやらポップな柄の本を読んでいる。

「今年の『ザ・全国魔王録』によると、ここにいる魔王はなかなからしいよ」

そんな本があるんだと、そっちの方が驚きだ。しかし、しゅりるりが何を持っていようが誰も突っ込まない、それが日常。

襲い来る魔物や罠を掻い潜り、魔王の元にたどり着く。

そこには黒い影の形をしたものがいた。猫を模した仮面をしているが、よくある正体不明の魔王の造形だ。

「猫仮面だ、猫仮面」

しゅりるりは見た目でこっさりあだ名をつける。

「ほう、早かったな。なかなか、骨はあるということか」

猫仮面は、何かを撫でながら、偉そうにしている。というか、猫仮面がなでているのは悪魔飴だった。頭をなでてもらっている。まるで猫だ。いや、魔王も猫の仮面をしているから猫っぽい。だから、どっちも猫だ。

「あ、コイツラ、コイツラ。イツモ邪魔してくるヤツら」

そつ言う悪魔飴は、大人しくなでられたままだ。

「なんで、ここにいるの？」

アトリスは言う。

「ふっふっふ、世界征服のためには、他の魔王のチカラも借りる必要がある！　で、その条件として、ここにいるのだ」

世界征服の手伝いをする代わりに、時々、悪魔飴を好きなだけなでるといふ交換条件らしい。意味が分からないが、そういうことらしい。悪魔飴も、撫でられるのは満更でもない様子。

猫仮面は、撫でるのをやめ立ち上がる。

「さて、悪魔飴。さびしいけれど、危ないから、もうお家に帰ろうね」

ものすごく甘やかしている。また撫で始めたよ。そんなに撫でるのが好きなのか。

「うん、良い結果、期待しているヨ」

悪魔飴は、いつものようにちゃららんと消え去った。

なんなんだろう、このほのぼの感。戦意がかなり削がれる。

「さて、話は聞いているぞ『私の』悪魔飴をいじめていたのもお前だな」

「私の????」

ああ、自分のものにしちゃったよ。仮にも違う魔王の手下なのに。これだから魔王は。人並みはずれた、所有欲と独占欲。

猫仮面はごまかすように咳払いする。

「さて、行くぞ！」

猫仮面の姿が、ぶれていく。そして、分身し、姿が増えた！

「うわぁ、なんだかやっかいだね」

しかし、なぜか嬉しそうなしゅりるり。

「ふはははは。果たして、このたくさんの分身から、見つけ出すことはできるかな？」

（人間どもは増えていく姿を見て、あわてているぞ、ふははははは）

「勇者、勇者、心眼とか使えないの？」

わくわく、きらきらした目を向けている。

「使えるわけ無いよ」

何を期待しているのだろうか。

「君のお祖父さんは、使えただけれどなあ。やってみなよ」

「……ええっ」

ここにきて、突然の無理難題。

「うう……」

やらなきゃいけないんだろうな。

「そこかな？」

アトリスは目をつぶり集中し、何か感じたところを攻撃してみた。
何か手ごたえのようなものを感じた。

「あ、あたっちゃった……」

攻撃は本体に見事に当たったが、致命傷では無いようだ。目をつぶって、全く見えない状態の攻撃ということにどこか恐怖があったらしく、いつもの半分の力も出せないのだ。

「むゝ要練習だね、でも、さっすが勇者」

勇者の血ってやつは意外と便利なのかもしれないと、アトリスは思った。

「ふふふ、もうおしまいかな？」

見た目に反し、心眼といった比較的高度な技を使うことには、正直驚いたがまだまだ未完成。将来が楽しみな逸材ではある。

「久しぶりに楽しめそうだ」

猫仮面はまだ余裕の表情だ。

「次は……面倒だから、全部、攻撃してみよう」 ありすまかせた！」

「あなたがすればいいじゃない？」

「ありすの方が、まともな攻撃系の魔法、得意だと思うよ？」

「まあ、そうかもしれないけれど」

自分で思うのもなんだが、確かにしゅりりりよりは、攻撃系の魔法は得意だとは思っけれど。

「そういえば、しゅりりりが、まともな魔法使っているところ、見たことないわ」

「使えなくは無いだろっけど、基本的な火の魔法でさえ結構力スタマイズしちゃったからなあ」

しゅりりりは「ほむらほむろ」と、火の魔法を短く唱え火をだすが、ころつと出てきたのは燃え盛る松明。

「本来は、アルコール度数高めの水も一緒に召還するんだけどね。その水を口に含んで、フォーと松明に向かって勢いよく水を吹きかければ、火炎を口から擬似的に吹けるんだよ。それが結構爽快なんだよね」

しゅりりりは、松明を振り回している。どんな宴会芸だ。

「『あわあわ』は泡だらけに、『きらきら』って唱えると星が頭の周りを回って、『どくどくろ』と唱えれば……」

まるで、おもちゃ箱をひっくり返したような使えなさそうな魔法たち。

「魔法はイメージと想いの強さとは言っけれど、あんまりだわ」

仕方ないので、ありすは全体攻撃魔法となえる。

「owet ebususukutikaya ahakugon" arumohoonoh"」

高度な魔法になれば、それなりに長い呪文を唱えなくてはならない。

「a hutenu kays on” orumohoon
oh”」

ここまで唱え終わると、巨大な炎が現れ渦を巻く。

「そうそう、そんな呪文だったね。さっすが、ありす」

先ほど、しゅりるりが使った火の魔法も、おかしいことをしていなければ、本来この魔法が発動するはずなのだ。

「u ohami kegu oki at nez on” o
rumoh”arumoh”」

唱え終わると、炎はたくさん猫仮面に向かって飛びかかる。魔法は本体にも当たったが、致命傷では無いようだ。

「やっぱり拡散する魔法は、決め手に欠けるわねえ」

まだまだ、自分は修行が足りない。ありすはそう思った。

「なかなかやるなあ」

この魔術師もそうとうなモノだ。魔王はそう思う。それにしても、あの白い服の少年は何だろう。行動がまったく読めない。自分が出した、松明を振り回しているだけだし。戦う気はあるのだろうか。

「しゅりるり、遊んでないで、ちゃんとしてよ」

一応、絶対絶命なのだ。多分。

「はい、まじめに戦いまあす」

しゅりるりは、ふうと息を吹きかけ、松明の火を消す。

「魔力の消費が激しいから、あんまり使いたくないけれど」

しゅりるりは、ものすごい速さで呪文を唱える。周りに魔力の霧が集い始める。

「こっちも対抗してやる」

あつという間に、しゅりりもたくさん増えた！猫仮面と同じ数だけ。

「あははは」

そして、賑やかさも倍増！

「むむむ。こいつ何者だ？」

猫仮面は、警戒している。ただ遊んでいるだけの者ではない。

「できる！」

二人は何をするでもなく、にらみ合っている。大半のしゅりりは、ボーっとしているだけのようにも見えるのだが、気のせいということにしておこう。

しばらく、二人は動かなかったのだが。

「もうそろそろ限界かな？」

口を開いたのは、しゅりりだ。

「……ぜいぜい、なかなかやるなあ」

猫仮面の分身が薄くなっていく。

「この手の分身は魔力だけではなく、体力消耗も激しいからね、持続にはコツがいるんだよ」

しゅりりも、分身を消していく。

「あっちが勝手に、気を張って無駄に消耗していたから、こっちは基本何もしていないんだけれどね。でも、ああ結構、疲れているなあ」

まったく、疲れていないように見えるのは錯覚だろうか。

「基本何もしていない、か」

あんなに畏ろしい体験をしたのは、久しぶりだ。

「あの瞳の光は只者ではないな。こうなったら……」

猫仮面は風景に溶けていく。同化していく。

「あれ？ 消えちゃった……？」

アトリスは、まったく気配が感じられなくなってしまった。

「ふっふっふ、隠れても無駄だ！」

しゅりるりは、すかさず「てい！」と呪文を唱える。岩は砕け散った。

「……わあ、木っ端微塵」

しゅりるりが攻撃をした場所には、そこには何も残っていないかった。

「ばっちり、手ごたえあり！……って、つい反射的に攻撃しちゃったよ、ああもう少し暇つぶしできると思ったのに」

なんか、猫仮面が哀れに感じたアトリスとありす。

でも、なんだか「ほっ」とする。

「うっう、よくここにいと分かったな」

どこからともなく、声が聞こえる。姿を現した猫仮面は、かなりの傷を負っているらしく、歩くのもやつとの様子。

「え？ そっち？ え、ええええええええええ？」

予想外の場所に猫仮面がいたので、アトリスは混乱している。

（しゅりるりが攻撃したのはあつちで、なんでこっちにいるの？）

「しゅりるりが、まともな魔法で攻撃するわけ無いでしょ？」

本当にまともな魔法は使えないのだなど、ありすは再確認する。

「ひとつの魔法について、どういう仕組みか、考えるのは無駄なのよ。理解するのは『ひとつ』ではなく、『全て』でなくてはいけない。それが魔法あり方なのだから。だから、長い時間と経験、ひらめきが必要なの」

詠唱短縮や魔法改造は、かなりの危険を伴う。魔法を深く理解していないと難しいのだ。

「どこを攻撃しているのかと思ったら。意味が分からないまま、ともに食らってしまったよ……」

しゅりるりの攻撃で、その場所に吹っ飛ばされたわけではなく、最初からその場所に隠れていたようなのだ。

「それにしても、見事な戦いであつた。我が人生に、悔いは無し……」

猫仮面はその場に倒れた。その顔は満足げであつた。

「こうして勇者たちは苦戦の末、とうとう魔王を倒したのだ！」
しゅりるりは、ナレーション風に言う。

「え？ ええええええ？ おわりなの？」

アトリスは、状況をまだ理解できないでいる。

「そして、世界は救われたのです」

しゅりるりは、またナレーションを入れ、ちよっと気取つたお辞儀をしたのでした。

「え？ え？ 何？ 何？ え？ え？ ちよ、ちよっと？」

おまけ

「我が、人生に、悔いはない……」って、台詞、格好いいよね」

戦いに明け暮れて、失うものもたくさんあつて、

それでも、自分の理想と約束のためならと、犠牲になっていく姿。
悲しき人生、でも、すばらしき人生。

「人生に悔いは無い」いろんな意味で、泣けてくる。

「あなたが言うつと……もはや、何もかもが、おかしいような気がするわ」

9・ネコ仮面現る！（後書き）

> i 2 4 9 2
— 3 1 2
<

10 - 1・布団からの手紙

「……手紙をもらっただよ」

伝書鴉（鳩ではなく、鴉だよ）で運ばれてきたしゅりる宛ての手紙。早速、封を開け読み出した。

「かぼちゃは うひひとわん季節です。いかがおすごしですか？」

そんな書き出しで始まっている。こんなステキな手紙が、秋に届いた。カボチャ色の風と、匂いをもなつて。しゅりるの友人なのだろうか、やたらフレンドリーな文体だった。

「誰からの手紙？」

ありすは魔術の本を読んだまま、話を聞いている。

「布団だよ」

「ぬのだん？」

聞き慣れない名前に本から目を離す。

「そう、『ふとん』とかいて、『ぬのだん』と読む」

これまた、なんだかいやな予感な名前。またおかしなことに巻き込まれるのか。ありすは、ため息をついた。

「その布団って？」

「魔王アネーハ率いる布団だよ。ちなみにアネーハの趣味は、城建築。たくさん手がけているんだよ。なんか、また城を建てて、素晴らしい出来だから、攻略しに來いだってさ」

「また、魔王なの」

嫌な予感を予想していたとはいえ、やはり気が滅入る。しゅりるは、あとどれくらいの魔王と馴れ合……いや、退治すれば、気が済むのだろう。

「彼は中級クラスの『本物』の魔王だから今までのとは、比べ物にならないくらい強い……いや大丈夫か。アネーハだし」

魔王アネーハは、城を作ること生きがいに行っているから、戦闘向きの魔王ではない。

「彼の城は、なかなかある意味スリリングだから、行ってみようか？　魔王アネーハの城は仕掛け満載、お手ごろな価格。今後行くであろう魔王城攻略に慣れておくためにも役に立ちそうだし。」

しゅりるりは手紙を鞆にしまう。

「そうと決まったら、アトリスを起こさなきゃ。勇者出動！」
しゅりるりは、部屋で寝ているであろうアトリスの元へ行く。

「見かけないと思ったら、また寝ているのね」
何もしていない時は、とにかく寝ているアトリスなのでした。

立派な城が建っている。ここは布団ぬのたんのアジト。魔王アネーハの居城。高く見えるが、実際は見た目ほどに高さは無い。城の石垣が上に行くにつれ小さくなっているので、遠近感が狂い、目の錯覚で実際よりも高さがあるように見えるだけなのだ。城の外見は重要、見栄は大切なのである。

その城の門には門番がいる。白いシーツを頭から被っている門番がいる。その白い布は布団の制服なのか、違うのか。

「……布団ねえ」

ありすの第一声。また変な人たちのような気がしているのでした。

こちらに全く気がついていない布団の門番の独り言が聞こえてくる。

「一日中見張っているのも疲れるなあ。この城に尋ねてくる人など、ほとんどいないのに……と、これは禁句禁句。だれかうちのボスを倒しに、侵入してくんないかなあ。曲者！　と言って襲い掛かってみたい」

布を揺らしながら、そんな独り言を言っている。

しゅりるりは、ここぞとばかりに門番の前に立ちふさがる。

「たのもう、君たちのボスを倒しにきたよ」 君のお望みどおり、グツとなタイミング？」

しゅりるりは親指を立てる。布団の門番の布の間から見えている目が輝きだした。

（きたきた！ 待っていたんだよこの瞬間）

「この門番を倒さない限り、通れないぞ。準備はいいか？」

（準備の時間を与える。オレ、なんて格好いいんだろう）

「いつでもいいよ」

「行くぞ！」

戦闘が始まった。門番は善戦した。3対1にもかかわらず。

「なかなかやるなあ。約束だ。通るがいい」

良い戦いだった。と門番は思う。

「いやあ、楽しかったよ。あっさり負けるのも、門番の務めさ。ふっ」

「門番も大変だね」 さあ行こうか」

門をくぐり、城の中へと入るのでした。

廊下を進むと広い部屋に出た。

「数々の畏、仕掛け、設備の数々を前にして、君たちは生きて帰ることができかな？」

なぜか後ろからついてくる門番。

「あなた門番でしょう？ 門はいいのかしら？」

後ろをついてくるだけで、特に害は無いので、気にしすぎても仕方ないのだが、ありすは、つい門番に突っ込んでしまう。

「う、気にするな」

客人が珍しいので、後ろからとはいえ、どうしても解説したくなってしまう門番なのでした。

「この部屋の仕掛けをとかないと、先に進めないぞ」

門番は仕掛けを解く邪魔をしないように、部屋の出入り口付近に立っている。出入り口に待機、ある意味で門番の鏡。

「さてアネーハの自信作とやらを、体験しよう」

魔力で出来た半透明な床に、仕掛けのスイッチがキラリと光っている。どうやらスイッチを押すと床が現れたり、消えたりするらしい。うまくスイッチを押さないと行けないような、離れた場所に、ご丁寧に宝箱まで配置してある。本格的だ。

宝箱の中身はすべて爆破草であった。しかも5、6束まとめて入っている。爆破草、名前のとおり、爆発する物騒な草。かなり強い衝撃を与えるか、火種が無いと爆発しないので、比較的安全に持ち運びができる道具。弱点はすぐに湿気にやられてしまうこと。

ひとつ鍵がかかっている宝箱があったが、振ってみた感じだとかさか音がして、爆破草だろうと思った。もう、たくさん持っていて、いらないのでほったらかしにしておく。

「これで、最後かな？」

少し違った色を放つスイッチを押すと、天井から階段が現れた。

「無事にあの仕掛けを、クリアしたみたいだな。この先に我らがボスがいらっしやるのだー！」

対岸の入り口で、門番は叫んでいる。

「さ、行こう」

この階段の先に、魔王アネーハがいるのだ。

おまけ

しゅりるり「ひとつ宝箱が、あかなかったんだけど」

布団の門番「う……（あの宝箱の鍵をなくしたとは、口が裂け

てもいけない……)」
しゅりるり「まあ、どうしてもいいんだけどね。」

10-2・布団がふつとんだ！

立派な赤い色の玉座に座っている。シートをぶっている者が。

「やっぱり布を被っているのね」

ただその布は、門番の綿っぱい素材の布とは違い、手入れも行き届いており、独特の光沢、柔らかそうな質感、絹製だろうか。動くたび、しゃきゅ、しゃきゅと、心地良い音もする。本物の絹であることの証明、絹鳴り。よく精錬されたものらしいことがわかる。

「私の前を素通りして宝箱を取りに行くとは、なんともはや、おろかなことよ」

あきれたような、ため息交じりのアネーハの言葉。そう玉座から少し離れた部屋の隅に宝箱があつたのだ。それを取ってから話しかけたのだ。

「まあ、よくあることだから、気にしないでおこつ。私は、アネーハ。布団ぬのだんの総裁にして、この城の主だ」

アネーハは、立ちあがり、両手を挙げる。

「うん知ってる。その後が続くであろう、長い能書きは言わなくていいからね」

しゅりるりはアネーハの言葉をさえぎる。魔王業をやって者は、普通の話でも無駄に長くなる傾向にあるのだ。

「それはそうと、おめでとつ、あの床はすごいねえ」

「ふふふ、ありがとう。ここから私の野望が始まるのだ！　そして、城を……」

「悦になっているところ悪いんだけど、実は今、魔王倒しにはまっているんだよねえ」

再びアネーハの主張をさえぎった。すっかりペースはしゅりるりのもの。

「覚悟はいい？」

「ふふふ、相変わらずおもしろい人だ。いいだろう相手になってやる！」

アネーハは絹の布を揺らす。この展開に満足しているらしい。布越しなので確信は持てないが。

「しかし『布団5人衆』を倒さないと、相手はしてやらんぞ」
アネーハは指を鳴らし合図を送る。

何も無い空間から7人の手下が現れる。

（7人いるような）

アトリスはそう思うが、口には出さない。なぜならありすが何も言わないからだ。突っ込むのは彼女の役目なのだから。

7人の布団は門番よりもやや弱いが、なにより数が多い。それでも3人は退けた。

「く、くそー。こうなったら」

すっかりボロボロになった布の布団リーダーらしき布が言う。

「今こそみんなの力をあわせるんだ！」

「おー！」

布団たちは一致団結する。

「布団^{ふとん}が、ふつとんだー!!」

しゅりるりは、突然、面白みのない普通の駄洒落を言う。

すると布団7名は大爆発・大音量・黒煙にまきこまれた。

いつのまにか、しゅりるりが7人いる『布団5人衆』の足元に爆破草を仕掛け、「ほむらほむろ」と短い呪文を唱えて召還した松明を火種としたのだ。

だから、7人はふつとんだのだ。

「ああまた、あの松明がでたわ……」

もう2度と出ない、アノ話だけでしか使われない出落ちの魔法か

と思ったのに。

布団たちのか細い声が聞こえる。

「こういうときは、何もしないのが敵としてのお約束だろう」

「何か夢のようなものの見すぎだよ。現実はきびしいよお。ふふふふふふ」

しゅりるりは、たいまつを得意げに振り回している。場所が町の広場なら、きつと寶銭が飛んでくるであろう。

「うぬぬ、私の手下をあつさりと」

「あいかわらず、せこいなあ。手下ばかり仕掛けないで、たまには自分も戦いなよ。一応、魔王なんでしょ？」

「うむむ、仕方ない」

アネーハは立ち上がると、不意について魔法を唱えた！

形を成した魔力が、3人を襲う。

MISS！

しゅりるりは華麗に避けた！

ありすは羽毛に包まれた！

しかし、ありすには効かなかった！

アトリスは羽毛に包まれた！

あまりの気持ちよさに、

意識が遠のいてしまった！

「だ、大丈夫？」

だめだ、羽毛にまみれて、ぐっすり眠っている……しばらく起きそくに無い。そのうち起きるだろう、放っておこう。

「……というか、アネーハ！ 不意打ちはびっくりするから、やめて欲しいよ」

しゅりるりにとって、あの程度のものは、不意打ちには入らないのだが一応言っておく。

「ふふふ、しかし、さすがしゅりるりだな。ここからが本番だ。いくぞ！」

それを分かっているアネーハもやっている。

ありすは、このまま様子を見ようか迷っている。たぶん、これは友人同士の戯れでしかないのだ。

「私も、あの魔法にかかれば良かったわ……」

なまじ耐魔力があるがために、眠りの魔法にかからなかったのだ。今からでも遅くないかもしれない。

「こっそり寝た振りしようかしら」

（……かからなかったことが残念に思うことなんて、あるのね……）

何も知らず、ぐっすり眠っているアトリスが、ものすごくうらやましく思えてきた。

「まあいいわ、しゅりるりは私の存在忘れているみたいだし、このまま傍観しましょう」

アネーハは白い布を被っていて、しゅりるりは白い服を着ていて、白い者同士。アネーハの布がたなびく、しゅりるりのマントもたなびく。遠目ではもはや白い布が戦っているように見える。

それにしても一人で魔王と対等に遣り合えるなんて。お互い、本気では無いといえ、おそらく、しゅりるりの方がずっと強い。

「しゅりるりって、何なのかしら」

魔王と知り合いなことといい、ありえない能力を見ていると、魔王に近い者のような気がしてくるのである。

「うぐぐぐ、やはり貴様には勝てぬのか。だがまだ終わってはいない。あのお方がいる限り……あのお方のためにも、この城から出すわけには行かない。こうなったら……」

色々しゃべりだす。中級魔王のスイッチが入っちゃった。

「今、君はあのお方から、独立したろうに。昔の癖が抜けていないんだね」

身内しか分からないネタだ。

「そ、そうだった。こうなったら、この城もろとも……消えるが良いい！」

お決まりの文言。揺れ出す部屋。

「うわ、城が揺れ始めたよ。べたべたな展開だな。脱出時間制限とあるのかな。わくわく」

「わ、地震？ に、逃げなくちゃ」

そろそろ魔法の持続時間も切れる時間というのもあり、揺れで目が覚めたようだ。わけも分からないまま、飛び起きた。

「わははははははは！」

アネーハは余裕の高笑いをしている。

そこへ慌てて入ってくる布団の門番。

「ボ、ボス大変です。2階の半分が崩落しました！ 残りも、時間の問題です」

「な、なにい！ そんなはずは」

（しかけを作るために建築基準法破りまくったからな、あの部屋は。しかし、それは想定済みだ）

「大丈夫、2階が崩落した程度では、この城は壊れないように作ったから大丈夫だ」

「え？ この城崩壊するんじゃないかったの？」

「ついつい突っ込んでしまうアトリス。」

「雰囲気づくりに揺らしたただけだ。安心なさい。まさかこの程度のゆれで、崩落するとは。透明床装置システムは改良の余地ありだな」

（2階が崩落？あの透明床の階？）

しゅりるりは、にやりとする。

（そういえば、このままだと、素敵なことがおきるなあ）

「あ、ちなみに、あの部屋の宝箱取らなかったのあるから、大爆発も起こると思うよ」

爆破草を侮ってはいけない。草とはいえ、箱の中には、5、6束入っているのだから。宝箱が落下した時の衝撃や、落ちてきた岩が何かの衝撃で箱が潰された時、大爆発してしまうだろう。

「えっ、宝箱全部とらなかったのか？ 爆発なんかしたら。本当に2階どころか、この階まで崩壊してしまう」

一同（しゅりるりを除く）に、絶望の色が立ち込める。

「魔王を倒すと、お城が崩壊するのは設計ミスのせいだったのか」

あはははは」

揺れの止まらない城の中、ひとり危機感の無いしゅりるり。

「笑ってないで、さつさと外に出るわよ」

「2階崩壊して、無いんじゃないか？」

おろおろしつつも、意外と細かいことを覚えているアトリス。

「じゃあ、どうやって逃げるのよ」

「あはは、飛んで逃げる？ ちょっと危ないけれど、ここにいるよりはいいと思うよ」

怖ろしいことを言う。それ以外に方法が無いなら、仕方ないのかもしれない。

覚悟を決めようか。どうしようか。

しゅりるりは、そんなアトリスとありすの様子を楽しんでいるようだ。あわてる人々を見て、とても、うけて……いや、落ち着いている。

「あるいは玉座の裏なんかによくある非常階段？　それが安全で良いんじゃない？」

しゅりるりは、玉座を指差した。

「きつとアネーハが準備してくれるよ。」

玉座の裏や、奥のほうの部屋にすぐに外へ出れる非常階段を造るのは、今や義務なのだ。

「そうだ！　そういえば、そんなものを造ったな。」

パニック状態だったアネーハは、玉座を動かしかかる。

「作った本人が忘れてどうするのよ。」

作業は、あまりはかどっていない。揺れのせいだ。

「この揺れを止めないと、作業しにくくなぁい？」

しゅりるりは笑みながら言う。この揺れ自体は、そもそも崩壊と関係なく、アネーハが起こしたものだ。だから、揺れだけは止められるはずである。予想外の出来事には、弱いアネーハなのでした。

——こうして、みな無事に脱出できたのでした。

城は全崩壊は免れたが、半壊くらいはしただろうか。布団たちはせつせと直している。彼らは基本的に造るのとか直すのが好きなので、壊されても気にしないのだ。

「酷い目にあったわ。」

もう2度と、崩落するような城には行きたくないと思うありす。

「まあ、あんな城だけど、安いし仕掛け満載だし、城を建てるならアネーハと言うくらい、魔王の間では、割と人気なんだよね。」

そういうものらしい。

「自分は絶対に注文しないんだけどね」

ああいう城が、非常に好きそうなのに、意外なことを言うしゆるり。

「意外ね」

「だって、自分の方がもっと素晴らしい城を作れるから、ね」

ああ、なるほど。一同は納得するのでした。

おまけ

アトリスの日記。

魔王の城は、アネーハさんが設計するらしい。

主が死ぬと、崩壊するシステムを開発したらしい。

それってかなり危険だね。

でも、地震には強くできているらしい。

よく分からない。

ああ、ひどい目にあつた。

7人いた布団5人衆。

みんなの力を合わせたら、どうなるんだろう。

合わせることなく、ふつとんでいった。

なんか、こんな夢を見ていたような気がする。

外伝3・弁当の話

「おれ、弁当屋の売人^{バイト}しているんだ。余ったやつ食うか？」

名も無き魔物は、悪魔飴に弁当を渡す。悪魔飴は、たまにこの魔物から弁当をもらうのだ。

「無果汁100%の飲みモノ、アル？」

「果汁100%のしかないなあ」

「無果汁100%の好きナンダケドなあ。しょうがない我慢スル」
そういつて、飲料水ももらう。

「そんなに弁当が好きなのか」
「ウン」

悪魔飴は弁当好きなのである。今までいろいろな所へ行っているというのもあり、いろいろなものを食べてきた。

一番楽しかったのは、紐を引っ張ると暖かくなるというおもしろ弁当。「駅」と呼ばれる人間たちの集まる場所で買った。そのときの駅は、周りの人間たちはぴりぴりしていた。人間たちが待っている乗り物が、「何か」（おそらくは、鹿だろう）を轢いて遅れていたらしい。悪魔飴には関係ないことなので、どうでもよかった。

次は冥界の川のほとりで舌が赤くなったり青くなったりする添加物弁当。冥界には秘宝だか秘法があつて、生身の人間でも訪れる事ができるのだ。無事に帰れるかどうかは別として。悪魔飴は、食べに来ているだけなので大丈夫。無事に帰れました。

あまり好きではないのは、裏取引が盛んな裏路地で、不法な肉を実は使っている闇弁当。食べなれていない肉は、独特の風味で、口に合わなかったのだ。この闇市を支配していた者（実は魔王）はある意味すばらしい方法で、人間社会に仇なしている。弁当を食べに来ただけなので魔王には謁見しなかったが、そのうち挨拶に行っ

ても良いかなと思っている。

（300年前くらいから、思っているだけ）

あと、あそこの弁当もなかなか良かった。天使の石像が美しい古代の空中庭園の墜落現場で……以下略。

回想もほどほどに。悪魔飴は魔物にもらった弁当を食べ始める。

魔物も隣で弁当を食べ始めた。どうやら自作の弁当らしい。

気になったオマイは、っ少しだけ弁当を少し貰うのだが、魔物が作った手作り弁当は、お世辞にも……うまくはなかった。魔物の味覚は、人型に近いほど人間に近い。だから、この獣型の魔物とは、好みが変わっているのだ。

「……久々に魔物のごはんッテ、感じの薄味な食べ物食べたヨ」

季節は春。桜が舞っている。日差しも意外と暖かった。

今日も、魔王城は本当に平和です。

外伝3・弁当の話（後書き）

> i 2 3 7 5
— 3 1 2
<

11-1・湖に浮かぶ火山島には魔王城

「勇者、勇者。そろそろ出かけるよ」

「お、おう！」

「最後まで、いつものパターンなのね……」

3人は村を出発する。

「いよいよ最後の戦いなね」

今一番、恐れられている「世界征服を企んでいる魔王」を倒しに行くのだ。

「大々的に世界征服を宣言する魔王って、よっぽど暇か、かまって欲しいんだろうね」

誰にも秘密でやれば、邪魔する輩など現れないのだ。

実力のある魔王の城と言うものは、なぜか行きにくい場所にある。離れ小島の山に囲まれた盆地だったり、洞窟の地下深くだったり、特別なアイテムで橋を架けないとわたれない場所だったり、半分異界に存在していたり。

これから行く魔王も普通の方法ではなかなか行くことができない場所に城を構えている。湖に浮かぶ火山島。ここに魔王城がある。

「あそこまでいくのかあ」

アトリスはあまりのり気ではない。いつものことだが。

「あそこまで行く方法、あるって言うていたけれど？」

この湖は魔王が放った魔物のせいで、船さえ出せない。出そうものなら、あつという間に沈められてしまうのだ。

「まかせて、今、友達を呼ぶから」

「友達……呼ぶ？」

アトリスはあまり良い予感はない。

しゅりるりは、さつそく地面に魔法陣を描き始める。

「何か、とてつもないもの呼ばうとしてない？」

ちよつとしたものを呼ぶには、この魔方陣は複雑すぎるのだ。なにか、こう封印されているモノを解き放つような、そんな感じの古代魔法文字。

そして、相変わらず作業は早い。あつという間に書き上げた。

「ちよつと下がって」

しゅりるりは、『友達』を呼ぶための呪文を唱える。

「u r u s n a k u o y s i n o k o k a m i o n o
m u b o t o w n a k u u k i k a r i h a r i b o
t o n n e g i z ” e g a k o t ” o n ” a m a z a h ” 」

地面に描かれた魔方陣が煌き歪み、空間が収斂する。それがだんだん形となっていく。容あるものの形、透明の空間の歪みの形をした生き物。大きく輝く紅玉のような瞳。

霞の息。

次元の扉が開き、それは召還された。

「わわ」

アトリスはしりもちをつく。予想よりも大きかったのだ。気配はするし、目で感知することはできるが、そこにいるのかいないのか分からない生物に、何か不思議な感じがしている。

「さ、乗ろう。勇者の空飛ぶ乗り物って行ったら、やっぱり竜とか天馬とかなんかそういう神秘的な動物でしょ」

「にしても、これは」

それは、『狭間の籠』と呼ばれている。名前のとおり、空間と空間の挟間に住むモノ。空間と言う概念が生まれたときからいる最古生物のひとつ。どこにでもいて、どこにもいなくて、どこでも行くことができる、どこにも行けない。とても人間が普通に気軽に乗れ

るものではない。そもそも感知することすらできない概念のような生物なのだ。

「それにしても、もう少し普通のもの呼べなかったのかしら」

それこそ、天馬とか竜とか。

「その場所の属性、相性、魔力の種類、連鎖、そのほかいろいろ考えるのが、面倒なんだよね。それに召還に使う媒体を準備するのがちょっと大変だし。『狭間の龍』はいつでも、どこでもあるというのが、移動手段として便利なんだよね」

概念の具現化は、ある意味で究極の魔法であり、魔法の最終的に行き着く先でもあるのだ。

「やっぱり魔法を普通の考えでは使わないのね、しゅりるりは」
だから概念を現成させることができるのかもしれない。

『狭間の龍』は3人を乗せて、まるで飛ぶように空間を泳ぐ。火山の頂に作られた漆黒の城の全景が見えてくる。

「どうやら、城はアネーハの作品だね」

しゅりるりは『狭間の龍』の背中で『ザ・城 - 近代魔王城編 -』という本を読んでいる。

「そんな本もあるんだ」

あの小さな荷物袋の中に、一体、何冊の本を持っているのだろうか？
「しゅりるりって、何者？」

アトリスは疑問に思う。魔王の知り合いはいるし、攻略本のような変な本も持っているし、割と高度な魔法も知っているし、なんか色々ぶつとんでるし。

「ひ・み・つ」

秘密主義は今に始まったことでは無いから、気にしたところで仕方が無い。

「それにしても、アネーハの、ねえ」

……この名前、とてもいやな予感。

「初期の作品だから、崩壊システムとか面倒な仕掛けは、あんまり無くて割と普通の城なんだよ。この前みたいなことにはならないと思うよ」

ありすの不安を察してか、しゅりるりは補足説明する。

「リフォームしていなければね」

しゅりるりは、そう付け加えてにやりと笑う。台無しである。

城の中は、特にこれといった目立ったこともなく、普通だったので省略。ただ広いだけの、これといって面白い罠もない普通の城だった。魔物もほどほどに出て、霧に覆われた視界の悪い迷路はあったものの、ただそれだけ。魔物は蹴散らせばいいし、迷路は壁に手をつけて進んでいけば、何も見つからないまま、入り口に帰ることはあっても、少なくとも迷うことはない。ただ攻略に時間だけがかかる城であった。

そして、魔王の間。ついにここまで来た。入り口から玉座までは赤い絨毯がしいてあり、玉座の後ろにはこれまた赤い幕がしてある。玉座の上に座っている人物。なんだかえらそう。間違いなくアレが魔王。

右の指で椅子の肘掛を叩き、リズムをとっている。あれは暇な者か、思い通りにならないがために落ち着いていない者がやる行為だ。隣には悪魔飴がいて、侵入者の存在に気が付く。

「やーッと、きたねー。こんどこそは、キミもおわりだよー、魔王様やっちゃってくださいよ」

あくまで他人任せな悪魔飴。

悪魔飴は、ちゃららんとスイッチを取り出した。

「これで気分向上、意欲上々、カチツと」

悪魔飴は、スイッチを押す。

すると、左右の壁に仕込んであるスピーカーから、鎮魂歌と行進曲を足して二で割ったような不可思議で、不可解な音楽が聞こえてきた。

「この音楽は、何？」

あまり心地いい曲とはいえない。

「このオンガクはー『魔王様の曲』！ さっき、つくったのさー。くくくく」

笑みを浮かべる悪魔飴。

音楽に気をよくしたのか、ジャグの表情はもう既に、勝利を確信しているような表情だ。

「よく来たな、勇者よ」

ありきたりな長い長い演説が始まる。時々、魔王にあわせて、都合よくタイミングばつちりに雷が鳴り響く。悪魔飴が流しているさやかな効果音だ。

「私は力を手に入れた、もはや、私は、神を超えたのだ！」

言っちゃった。自意識過剰な台詞を。

「それじゃあ、自分はその神を超えた君よりえらい！」

しゅりるりも負けじと言い放つ。意味があるのか、この意地の張り合い。もはや子供の喧嘩に成り下がってしまった。しかし、魔王は冷静だ。今までの魔王とは、やはり精神的に大人……いや、一味違うということだ。

「……ふ、面白い奴だ。少し遊んでやろう」

強大な力を持つ魔王に立ち向かう、小さな人間たち。これらと戦うことは、所詮、戯れにすぎないのだ。

「遊びでいいの？ 本気でこないと後悔するよ？」

しゅりるりは、本当に『遊び』で戦う気にいる。

「……確かに、本気じゃないと後悔するわね……魔王が」

ありすは、そう小さくつぶやいた。『遊びで』なんていったら、いろいろな意味で危険、必ずや後悔するにちがいない。

そんなことは知らない魔王は戦いのスタートの言葉を言う。

「さあ、かかってくるがいい。勇者どもよ！」

こうして、戦いが始まった。

勇者と魔術師は人間にしては、なかなか部類に入るのだが、それでもまだ本気を出すまでもない相手。魔王はそう思っている。

しかし、この白い服の少年は……人間のようないきさまを身にまとった人間のようにに振舞ってはいるのだが、明らかに次元が異なる存在。何もかもが規格外。別格なのだ。魔王はそう感じていた。

魔王は「遊びでいいの？ 本気でこないと、後悔するよ？」という言葉の意味が判ったような気がした。『遊び』『戯れ』で戦ってやっつけているのは自分ではなく、あのしゅりるりという名前の者なのだ。『ぐつ』

このおもちゃ箱をひっくり返したような……いや、実際におもちゃ箱をひっくり返した攻撃は、精神的にも耐え難い。しかし、歴然とした力の差を感じている。

「こんなこともあるのかと……」

しゅりるりは、どこからともなく、複線もなしに、何の前触れもなく壺を取り出す。脈絡のない攻撃が再び来る。魔王は身構える。

しゅりるりは、それを魔王の頭にかぶせる。なんとそれはぴった

り。
「あ……抜けない！ た……たすけて……」

それは、魔法でできたつぼ。魔力を、どんどん吸い取る凶悪なつぼ。失われていく魔力。このままでは、全て失ってしまう。

「あう、世界征服の野望が」

つぼの中に声が響く。

「うぐぐ。私に最強の力を与えたと言うのはうそだったのか!」

やっぱり、つぼが取れない魔王は、叫ぶ。

「まさか、裏で操る者がいたのか!」

しゅりりりは、わざとらしく驚き、待ってましたとばかりに、とてもうれしそうに言う。

「ありきたりね……」魔術師は言う。

「ええ、まだ続くのお」勇者はすでにやる気がない。

何者かに操られていただけの傀儡な魔王にもう用はない。

「おまえなんて、飛んでいっちゃえ」

しゅりりりは、爆破草を使う。さすが魔王というか、盛大に吹っ飛びはしなかったが、転がってどっかに言ってしまった。多分、もう戻ってこないだろう。恥ずかしくて。

そして、これが魔王ジャグの非常に物足りなく情けない最後(?)であった。

その時、この時を待っていたかのように、赤い幕の奥から不気味な声が響いてくる。

「ふっふっふ。さすが、というべきか……」

幕で隠されているが、奥にも部屋があるらしい。そこから笑い声が聞こえる。

そこにジャグに力を与えた、本当の黒幕がいるのだろうか。

「おまえも片付けて、ゴミ箱にばいしてやる」

しゅりるりはよく漫画かなんかで、集中線バリバリで指差してバ
ーンとやるような感じのテンションだ。

おまけ

「今回の魔王は、正統派魔王だったね♪」

「いや、あれは違うんじゃない……」

壺を被せられたの姿を思い出すと、どうしても領けない。

「でも、正統派のシリ阿斯魔王だったとしても、しゅりるりにかか
れば、お笑い系に変えられてしまうような気がするわ……あ、あと
悪魔飴もいるとねえ……二人は兄弟なんじゃないかしら」

それは無いと思いつつも、なんだか、ありえなくは無いような気
がしているありすなのでした。

11-2・最終決戦！

玉座の後ろの赤い幕、その奥に隠された部屋に黒幕がいる。

「赤い幕なのに黒幕とは」

しゅりるりは、くすくすと笑う。

「はいはい、さっさと行くわよ」

ありすは、適当にしゅりるりを受け流す。慣れたものである。

赤い幕を開く。奥の部屋にいたのは、見慣れた黒いシルエット。

なんとそれは悪魔飴であった。

「セツカク強そうなヤツ魔物たちをスカウトしたのに、役立たずばかりダナー。その中でも、ジャグにはうるとらすーばなすぺしゃるびーむで、闇の力を与えて一番強いはずナノに……」

黒幕には見えない威厳のなさ、口調。しかし悪魔飴が裏で支配する者だったのだ。

「ヤッパ、インスタントな魔王では、本物の勇者には勝てないの力

ー」

悪魔飴はため息をついた。

「そうインスタントな魔王じゃ、勇者に勝てないよ」

「こっちも、インスタントな勇者なんだけれどね」

ありすも、ため息をつく。

「一応、ボク、勇者の血は引いているんですけど」

しかし、アトリスの言葉は、誰にも届いていない。

「う、どうでもいいけどさ」

「こーなったら、魔王を超える大魔王の力、見せてアゲルよー」

悪魔飴が軽く一回跳躍をすると、悪魔飴の体が黒い霧に包まれる。魔力の集約する所。闇の底。

それは、 はじまりの合図

黒い霧をまとった悪魔飴は赤い絨毯の上に音もなく舞い降りる。その動きは普段と異なり滑らかであった。悪魔飴の着地すると、風が巻き起こり絨毯が燃え上がる。悪魔飴の身体は今、高濃度の魔力を帯びているのだ。悪魔飴の発する魔力は床に魔方阵を描き出す。

それは、 闇 それは、 影

それは、 深淵の底にある。 光の影、 光の形

銀の炎の魔法陣が煌いた。悪魔飴の体が、闇に溶けていく。重々しい鼓動が響く。静寂の空間を破らぬように、赤い瞳が現れた。姿が実態になっていく。

闇色の蜥蜴^{トカゲ}になる。一点の斑もない濡鴉色の鱗は、闇に良く馴染む。煌く雷光を微かに反射させ、その存在を明らかにする。

「道化の姿に変装し、演じるのも疲れるものよ」

今までのあの動作・口調は偽りだったということなのか。変身前の行動が、すぐくあれだったので、この姿、口調の変貌はなかなかギャップが。

これが世界征服をたくらみ、世間を騒がせている者（ある意味そうつと騒がしかったが）の真の姿。

それは、 闇の底にいる存在

それは、 恐怖 それは、 畏怖

「恐怖に色どられた畏怖、これは、これは噂の闇蜥蜴だあ」
しゅりるりは、なぜか知っている。

「上級の魔王になると、何かに変身できるんだよね」

しゅりるりは言う。魔王が変身する最終形態というやつだ。

「ほほう、私のことを知っておるとは、なかなか博識よの」

悪魔飴は感心している。

「ふっふっふ、常識は良く知らないけれど、雑学ならまかせて♪」

魔王の正体、雑学扱い。

「いいのかしら。それで」

「クククククククク……。ふざけていられるのも今のうち、この身体であれば、人の子など、虫ケラも同然。お主等をそこへ葬ってやるう」

神鳴りが都合良く悪魔飴の言動に合わせ、光と共に音を轟かせる。邪悪なる者を貫くという神鳴りも、こういう時だけは悪役の味方なのである。

「我は破壊の神なり」

光でさえも飲み込むような黒い微笑を浮かべながら悪魔飴は、一歩踏み出した。

それは破壊。

それは破壊。

闇の存在の

在り方の言葉

「この光で満ちた世界を闇の波動で満たし私の支配下にゆグホッ……ケホッ」

悪魔飴は息が喉につまり、身体を震わせている。

「ち、ちよっとむせた……」

どうやら、長い台詞のせいで呼吸をするところを見失ったらしい。「そ、そんなメで、みるなよー。よし！ もう一度だ。クククククククククク、愚かなる虫ケラどもよ。わ、我が……毒牙で、はらわたを食いちぎり……耳を……いや、耳から……ミミを……くすぐるぞー！！ コチヨコチヨとな」

悪魔飴は威嚇するために両腕をあげた。途中までは格好良いと思
ったが、姿が変わったとはいえ、いつもの悪魔飴がそこにはいた。
「……うぐーやっぱり、なれないセリフはイヤだ！。もうキミらの
せいで、ナニもカモが……丸、三角、四角、星、渦巻、温泉、音符、
疑問符、感嘆符」

もはや、言葉が意味不明を表す記号と化している。さすが悪魔飴
である。

しゅりるりは、おかしさのあまり笑い出す。

「うくくく、あはははは、さすが、悪魔飴、いや、Μεση φω
vηのομαί！さすが、中動相の化身。その名の通り、自分自
身が何かするのは、苦手なんだね」

しゅりるりは聞きなれない言語をいう。

「確かこれは、君の故郷の言葉なんだけれどな。違っていたかなあ

……」

「むむむ。なぜ、それを……」

「君の正体を知っているんだから、故郷くらい少し知っていてもお
かしくないでしょ」

魔王や魔物の名は大抵意味があり、それはその者の性質も現して
いる。

『動詞がομαίの語尾を持つと中動相つてのになる。受動っぽく
なるらしい』

しゅりるりは、そんな程度しか知識として持ち合わせていないが、
雑学だからその程度でもいいだろう。それに、今は『中動相』なん
て、まったく関係ない場なのだし。

「とつくに気がついてるものだと思っていただけ。自分も、ま
だまだ有名じゃないのかあ。まあ、むしろ有名になっちゃいけない
存在だからね。そういう意味では表立って活動してきた割に、この

程度の知名度なのは、これは成功というべきかな」

しゅりるりは、自分の行動を自分自身で褒め称えている。

「自分は、ほとんどの魔王の顔と名前くらい全部知っているのにな。新旧、現役、引退ともに。まあ、暇つぶしの一環で、色々調べているからなだけれどね」

だとしても、しゅりるりの雑学の知識量は、とんでもないものらしい。

しゅりるりは、アトリスをみる。

「ちなみに魔王だけじゃなく、勇者も大体把握してるよ、この本で」

荷物入れから『ザ・勇者の系譜（492巻）』という本を取り出す。そんな本まであるらしい。本当に何冊の本がああ小さな袋の中に入っているのだろうか。

「でも、人間は寿命が短いから、結構な頻度で最新版を出さないといけないんだよね」

「よく分からないけれど……だからボクが勇者の子孫だって、知ってたんだね」

あまりいい気分ではない。

「……まさか。あなた様は……」

悪魔飴は一連の行動を見、しゅりるりの正体に気がついたようだ。急に態度が改まる。

「さすが上級魔王ともなると、違うね。知識……常識として『知っている』のだから」

それは知識。それは英知。世界の根源になるもの。

「えらい！」

にこりと微笑む。

「そもそも、なぜ、あなた様ともあろうお方が、邪魔を」

「暇だった」ていうか、今さらあなた様って、いつも通り、普

通でいいよ。そんな偉いつもりはないんだから」

「噂どおり、気まぐれな……つまり運がなかったということか」
これこそ、本当に運命の悪戯というヤツだ。

「あはは、そういうこと」

「二人で盛り上がっているところ悪いんだけど、あなたって、一体？ 何かの魔王？ それとも何かの神？」

ありすは、今までたまっていた疑問をぶつける。

「どっちも、はずれ。どちらの勢力にも属さない。全てに属してないんだよ」

しゅりるりは、腕を組む。

「ん」正確には、創造神の次の次の次……くらいの存在……いや、そもそも、何にも属してないから、階級とか序列という概念が存在しないけれどね」

それは、それでもあり続ける存在。

「すごく、微妙すぎて、わからない……わ」

しゅりるりが、人間ではないことに、うすうす気がついていたとはいえ、住んでいる次元が違うことだけは確かだ。

「分かりやすく言うと……なんだろうなあ。この世界には、数多の神がいて、数多の魔王がいる、そして、それを裏で操る大魔王やら大臣やら真のラスボスがいる。善とか悪とか、光と闇とか、帝国と共和国とか、それらの戦い、それらの正義」

それは、表の物語

それは、

中心の物語

世界を作る成り立ち

大切な形

「それとは全く関係ないところに、現れるやたら強いモノ。噂や伝説でささやかれる程度で、知る人はおるか、その存在すら実在するか分からない者たちがいる。そう、ウラボスって言われたこともあるね。場合によっては、神と同格の存在。自らのその強大な力によって有名になれば『神』にさえなえる領域の者？」

悪魔飴に引続き、しゅりるりの正体までも発覚してしまう、最終決戦付近で起こる急激な物事の暴露は良くある事である。

「まあ、最後だし。ネタばらして言うことで、ちょっとだけサービスね」

『全てを語っていないよ』とような、すっきりしない雲をつかむような言葉。

「もしかして神も…… やっぱりこんなのりなのかしら」
ありすは、ちよつとした不安を覚えていたのです。

「しかし、そうと分かったところで、野望はとめられぬぞ」

悪魔飴は、勝つ気でいる。しゅりるり一人ならともかく、今は、足手まといの人間が二人いるのだ。

「仲間を見捨てないのは、知っているからな」

しゅりるりが、一度仲間にした人を、見捨てないのは、知っているからだ。

「何にも属さず、何にも囚われない。しかし、だからこそ、絆というしがらみに、何かに縛られてみたくなるのだろうか？ 辺境に誰にも知られず、ずっと暮らさなくてはいけない孤独な者よ」

誰よりも孤独な存在。世界でもっとも孤独な存在。

(……それは、長い長い時間の定め……)

「孤独？ そんなことはないんだけどね。現に今も、あの場所から抜け出しているし。まあ仲間を見捨てないのは、本当だけれどね」
”それは、一瞬”の出会いようで、”それは、永遠”に終わらない。楽しい暇つぶしさ

(まあ、間違っではないいな。孤独な存在はどこに行っても、孤独として在り続ける)と、しゅりるりは思う。

両者はにらみ合う。

「覚悟はいいか？」

「……覚悟はできた？」

悪魔飴としゅりるりは、同時に言い放つ。

「*urra o m̃āna hi nokos i an etee bu b̃a ño k̃o h̃a m̃o ñi u u h̃*
”森羅にあなたに有し、万象の数多を消す封印の魔法”をその身に受ける、覚悟はできた？」

しゅりるりは、すでに長い長い呪文を唱え終えようとしていた。

「な、に？」

しかし、悪魔飴は気が付く。気が付いてしまった。……自分の負けを。

今まで、それにまったく気が付けなかったのだ。

「*uttee kuoot a hero*
”それは、眠り。” *sirumen a heroes*”の「
凍結

今までしゅりるりは、隠すように呪文を詠唱していた。

時に自然に、そして時に不自然に。

魔法の詠唱を。

徐々に背後に隠さずに詠唱する。そのほうが魔力の消費も少なくともすむからだ。

「いつの間に、『その呪文』をとねえたんだ！」

詠唱に非常に時間のかかる封印の魔法。しかし、すでに最終段階に入っていた。しゅりるりの背後に淡く潜む魔法の扉が開き始めている。

「実は暇をみて、少しづつ唱えていたんだよ……まさか、こんなにうまくいくとは思って 無かった」

いくら、しゅりるりが超越した存在でも、最強クラスの攻撃から、普通の人間であるアトリスやありすを守るのは、なかなか容易では

なかったし、それを実行できなくはないが、するためには、色々な面倒なことがたくさんあったのだ。

悪魔飴の変身の儀式と、最終戦には欠かすことのできない演説が長そうだったので、万が一のことを考え、呪文を唱え始めていたのだ。いつものように、すぐにはちよっかいを出して邪魔することをしないで、封印の魔法を唱えていた。

仮に戦闘が始まるまで、詠唱が間に合わなくとも、詠唱中断の魔法も組み込んであるので、途中、他の行動を起こしても詠唱の効果が無駄になって消えることもなく、一気に最初から最後まで唱える負担がない。

戦闘の合間の隙を見て、続きから唱えれば良かった。

ちからまかせの荒技中の荒業。

詠唱中断魔法の維持に、中断したあとに行う魔力の流れの切り替えに、大量に、無駄に、魔力消費してしまうことと、長い時間中断は、できないということだけは、気をつけなくてはいけない。

それでも、魔法史上5本の指に入る長さの呪文は、この荒技を使えば、戦闘の早い段階で詠唱の大部分は完成し、危機的状況になる前には、発動できるようになる。

つまり、最初から悪魔飴には勝ち目はなかったのである。

「……ぐ、何から何まで」

手のひらの上というのは、こういうことか。

「……こんなに、早く詠唱が終わるとは思わなかったけれど、ね」
適度に中断して、伸ばし伸ばし唱えていたのだが、まさか戦闘が始まる前に完成してしまうとは、しゅりるりも思わなかった。

「うまくいかないものだね、」otogonom 物事おやすみつて、なさい onirawo a
heros”” i as an i musayo” 悪魔飴

……」
そして、しゅりるりは最後の詠唱を終えた。

悪魔飴の脚が、凍りつきはじめる。悪魔飴は己の負けを悟った。しかし、悪魔飴は考えていた。

負けるとき、という言葉。大抵の魔王は、似たようなことしか言わない。個人的に違う言葉を言いたいと思う。しかし、思いつかない！

「うぐう」

もう時間がない。仕方ない、使い古された言葉を使うしかなかった。悪魔飴は、深呼吸する。

「これで終わったと思うな……いつの日か、また新たな闇が現れるだろう。全ては繰り返し……永遠に、な」

決まった！ と、悪魔飴は思った。

この言葉を言い終わった後は、全てが凍りついていくのを待つだけであった。最後だけでも、格好良く決まったので、自己満足の笑みを浮かべていたのである。

しかし、世の中は上手くいかないものである。おそらく、雪が冷たかったのだろう。雪の静寂に吸収されつつも、微かに聞こえた悪魔飴の「くちゅん」という、小さくて愛らしくしゃみがなければ、完璧であったのだ。

……こうして、世界の平和は守られたのです。

「……あの封印は、いつくらいに解けるの？」

「けっこう、あつという間に解けるかな。……500年くらい？」

「……あつという間に、ねえ」

11-2・最終決戦！（後書き）

悪魔飴という言葉、なにかこじつけられないかなと思って調べてみたら、

丁度いい感じに、ギリシア語に中動相のομᾶιと言うのがあったので、ピンと来て、こじつけました。

初めて知りましたよ、中動相なんて。

何てぴったりなのでしょう、運命感しました。

……でも、ギリシア語の中動相は、唐突で、こじつけすぎたかなと、ちよつと反省。

……呪文隠す方法を模索するために、無駄に一日かかってしまった。
でも、自己満足しました。うん、満足満足。

エピソード？・勇者は必要だったのか？（前書き）

いるかいないかわからない、エピソード。

エピソード？・勇者は必要だったのか？

「世界を救う旅に、ぼくたち、必要だったのかな？」

町を歩けば勇者として称えられる名声を手に入れてしまい、面倒なことになっているアトリスは言う。

「しゅりるりの暇つぶしの遊び道具として、必要だったんじゃないの？」

紅茶を飲みながら、ありすは、さらりと言う。

しばらくはゆっくりできそうなので、その優雅な午後に満喫しているようだ。

「ひどい」

「ひどい」

アトリスとしゅりるりは、同時に言った。

「わ、しゅりるり。帰ったんじゃないの？」

相変わらず神出鬼没。

「今度は何の用なのかしら？」

「ふふふ、基本的に暇なので、なんとなく来たただだよ」

そしてまた、波乱の予感。

アトリスと、ありすと、しゅりるりの旅は、そう簡単に終わりそうにない。

次回予告？

しゅりるり「実はまだ、続きます。次の舞台はひよこまみれの世界！」

アトリス・ありす「え、まだ続くの？」

ふたりは、落胆する。

しゅりるり「暇つぶしのネタは、そこら辺に転がっているのです」

でも、その話は……別の話。

エピソード？・勇者は必要だったのか？（後書き）

あとがき……特に書くことないから、呪文で使われていた言語についての設定でも言おうかな。

「魔法は、ノヒン語（nohin）で唱えるのが正式で安全である」
「魔法は、言葉の持つ概念や想像が合えば、別の言語でも代用できる。但し、安定させるのは、相当の創造力が必要」

ノヒン語、言ってしまうえば、よくある作り物の、架空の言語ですね（笑）

まあ、一応、ある法則で作っているので、でたらめというわけではないです。

くるくると、逆立ちでもしながら考えると、分かるかも♪

ともあれ、みなさんの貴重な暇つぶし時間のお役に立てたかどうかは、わかりませんが最後まで、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530h/>

くるくるしては閑暇と鳴くよ、啼かないよ。

2011年8月24日15時15分発行